

50583

教科書文庫

5.
810
41-1946
20000 42086

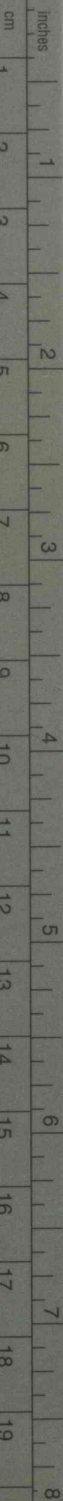
114

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



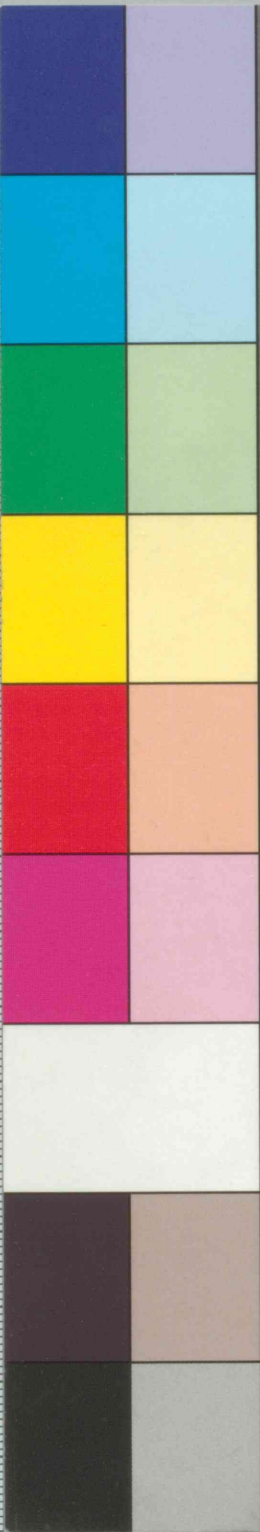
© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3159  
ChuZO  
資料室

國語四

中等學校男子用

中等學校教科書株式會社



資料室

375.9  
Chu20

國語四

中等學校男子用

中等學校教科書株式會社

文部省檢定濟  
昭和二十一年三月十一日  
中學校・實業學校國民科用

目録



國文篇

一 倭建命 一  
 二 白珠 三  
 三 賀宴 五  
 四 源氏物語論 六  
 五 白良の濱 十二  
 六 水屋の働き 十二  
 七 年來稽古 十五  
 八 一筋の道 十八

文法篇

一 文節の構造……………二十二  
 二 文節と文節との關係……………二十五  
 三 文の構造……………二十九  
 四 文の種類……………三十三

漢文篇

一 論 學……………三十七  
 論「學示ニ家塾諸生」 學問・事業  
 不レ殊ニ其效ニ 白鹿洞書院揭示  
 論「東漢教化」  
 二 經 國……………四十一  
 爲レ政以レ德 王道 以レ修レ身  
 爲レ本 九經  
 三 氣 節……………四十八  
 大丈夫 懸窩記  
 四 文 藻……………五十  
 唐之文藻 後出塞 哀江頭  
 把レ酒問レ月 峨眉山月歌 送  
 元二使ニ安西 春曉 師說  
 左遷 至ニ藍關ニ示ニ姪孫湘 潮  
 州韓文公廟碑 種樹郭橐駝傳  
 江雪 慈烏夜啼 前赤壁賦  
 岳陽樓記

國文篇



一 倭建命 古事記

走水海を渡ります時に、その渡りの神、浪を立てて、御船たゆたひてえ進み渡りまます。こゝにその後、御名は弟橘比賣命まをしたまはく、「妾、御子に代りて海に入りなむ。御子は任の政遂げてかへりごとまをしたまふべし。」とまをして、海に入りまきむとする時に、菅壘八重・皮壘八重・繪壘八重を波の上に敷きて、その上におりましき。こゝにその荒浪おのづから風ぎて、御船を進みき。かれ、その後の歌はせる御歌、さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも

かれ、七日ありて後に、その後の御櫛海邊に寄りたりき。乃ちその御櫛を取りて、御陵を作りてをさめおさむ。それより入りいでまして、悉に荒ぶる蝦夷どもを言向け、又、山河の荒ぶる神どもをやはして、還り上り

ます時に、足柄の坂本に到りまして、御糧聞し召すところにて、その坂の神、白き鹿になりて來立ちき。かれ、その御食し残りの蒜の片端もて待ち撃ちたまひしかば、その目に當りて打ち殺さえたりき。かれ、その坂に登り立ちて、ねもころに歎かして、「あづまはや。」と詔りたまひき。かれ、その國を阿豆麻とはいふなり。即ちその國より越えて、甲斐に出でて、酒折宮にまし／＼ける時に、歌ひたまはく、  
 にひばり 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる  
 こゝにその御火燒の老人、御歌を續ぎて、  
 日々並べて 夜には九夜 日には十日を  
 とぞ歌ひける。こゝをもて、その老人をほめて、東の國造にぞなしたまひける。

こゝに詔りたまはく、「この山の神は徒手に直に捕りてむ。」と詔りたまひて、その山に登ります時に、山のべに白き猪遇へり。その大きき牛の如くなりき。かれ、言舉して詔りたまはく、「この白き猪になれるものは、その神の使ひ者にこそあらめ。今殺らずとも、還

らむ時に殺りてむ。」と詔りたまひて登りましき。こゝに大水雨を降らして、倭建命をうちまじとはしまつりま。かれ、還り下りまして、玉倉部の清水に到りて、息ひませる時に、御心や、覺めましき。かれ、その清水を居寤清水とぞいふ。

そこより發たして、當藝野の上に到りましし時に詔りたまへるは、「吾が心、常は空よりも翔り行かむと思ひつるを、今吾が足を歩まず。たぎしの形になれり。」とぞ詔りたまひける。かれ、そこを當藝といふ。そこよりや、少しいでますに、いたく疲れませるに因りて、御杖を衝かしてや、／＼に歩みましき。かれ、そこを杖衝坂といふ。尾津崎の一つ松の許に到りませるに、先に御食しせし時、そこに忘らしたりし御刀、失せずてなほありき。かれ、御歌詠みしたまはく、

尾張に 直に向かへる 尾津崎なる 一つ松  
吾兄を 一つ松 人にありせば 太刀佩けまし  
を 衣着せましを 一つ松 吾兄を

そこよりいでまして、三重村に到りませる時に、又、「吾が足、三重のまがりなして、いたく疲れたり。」と

なづきの 田の稻幹に 稻幹に 這ひもとほろ  
ム 野老蔓

こゝに入尋白智鳥になりて、天に翔りて、濱に向きて飛びいましぬ。かれ、その後たち、御子たち、その小竹の刈枝に、御足切り破るれども、その痛きをも忘れて、泣く／＼追ひいでましき。この時の御歌、

淺小竹はら 腰なづむ 空はゆかず 足よゆく  
な

又、その海塩に入りて、なづみ行きましし時の御歌、  
海がゆけば 腰なづむ 大河原の 植草 海が  
は いさよふ

又、飛びて、その磯に居たまへる時の御歌、  
濱つちどり 濱よは行かず 磯づたふ

この四歌は、皆その御葬に歌ひたりき。かれ、今にその歌は、天皇の大御葬に歌ふなり。かれ、その國より飛び翔りまして、河内國の志幾に留りましき。かれ、そこに御陵を作りて、鎮まりまされしめき。その御陵を白鳥御陵とぞいふ。然れどもまた、そこより更に天翔りて飛びいましぬ。

詔りたまひき。かれ、そこを三重といふ。

そこよりいでまして、能煩野に到りませる時に、國思ばして歌ひたまはく、

倭は 國のまほろば たなづく 青垣 山ご  
もれる 倭しうるはし

又、

いのちの 全けむ人は たみこも 平群の山  
の くまかしが葉を 鬘華にさせ その子

この御歌は思國歌なり。又、歌ひたまはく、

はしけやし 吾家のかたよ 雲居立ち來も  
こは片歌なり。この時御病にはかになりぬ。こゝに御歌を、

をとめの とこのべに わが置きし つるぎの  
太刀 その太刀はや

と歌ひ終へて、即ち崩りましぬ。かれ、驛使を獻り

こゝに倭にます后たち、又、御子たちもろ／＼下り來まして、御陵を作りて、そのなづき田に腹這ひもとほりて、哭かして、歌ひたまはく、

二白珠 萬葉集

舒明天皇御製

夕されば小倉の山に鳴く鹿はこよひは鳴かずいねにけらしも

額田王の歌

秋の野のみ草刈り昔き宿れりし兎遣のみやこの假慮しおもほゆ

柿本朝臣麻呂の壽旅の歌

稻日野も行き過ぎがてに思へれば心戀ほしき可古の島見ゆ

高市連黒人の壽旅の歌

いづくにかわれは宿らむ高島の勝野の原にこの日暮れなば

慶雲三年丙午、難波宮に御幸せる時、志貴皇子の作

りませる御歌

葦べゆく鴨の羽がひにしも降りて寒きゆふはやまとしおもほゆ

神龜元年暮春の月、吉野離宮に御幸せる時、中納言

大伴旅人卿、勅をうけたまはりて作れる歌

昔見し象の小川を今見ればいよよさやけくなりける

かも

山部宿禰赤人の作れる歌

ぬばたまの夜のふけぬれば久木生ふる清き河原に千鳥

しば鳴く

あしひきの山にも野にも御獵人さつ矢手挟みみだりた

り見ゆ

湯原王、吉野にて作れる歌

吉野なる夏實の川の川よどに鳴ぞ鳴くなるやまかげに

して

大伴坂上郎女の月の歌

獵高の高圓山をたかみかも出で來るつきのちそくてる

らむ

ぬばたまの夜霧の立ちておぼほしく照れる月夜の見れ

ば悲しさ

大伴家持の秋の歌

雲がくり鳴くなる雁の行きて居む秋田の穂立繁くし念

ほゆ

三賀宴 源氏物語

紅葉賀

朱雀院の行幸は、神無月の十日餘りなり。世の常な

らずおもしろかるべきたびのことなりければ、御方々

の物見給はぬことをくちをしがり給へば、上も飽かず

思され、試樂を御前にてせさせ給ふ。源氏の中將は、

青海波をぞ舞ひ給ひける。片手には大殿の頭中將、

かたち・用意、人に異なるを、立ち並びては、花の傍ら

の深山木なり。入りがたの日影さやかにさしたるに、

樂の聲まさり、物のおもしろきほどに、同じ舞の足踏

み、面持、世に見えぬさまなり。詠などし給へるは、

これや佛の御迦陵頻伽の聲ならむと聞ゆ。おもしろく

あはれなるに、御門涙落し給ふ。上達部・親王たちも

皆泣き給ひぬ。詠果てて、袖打ち直し給へるに、待ち

取りたる樂の賑は、しきに、顔の色あひまさりて、常

よりも光ると見え給ふ。

行幸には、親王たちなど、世に残る人なく仕う奉り

給へり。春宮もおはします。例の樂の船とも漕ぎ巡り

雨ごもりこゝろいぶせみ出で見れば春日の山は色づき

にけり

びき

天平十年戊寅、元興寺の僧の自ら嘆く歌一首

白珠は人に知らえず知らずともよし知らずとも吾し知

れらば知らずともよし

天平十六年甲申春正月十一日、活道岡に登り、一も

との松の下に集ひてうたげせる歌

一つ松幾代か經ぬる吹く風のこゑのすめるは年ふかみ

かも

大伴宿禰家持、天平十八年閏七月を以つて越中國守

に任けられ、即ち七月をとりて任所に赴く。時に姑

大伴坂上郎女、家持に贈れる歌

道のなか國つ御神は旅行さも爲知らぬ君をめぐみたま

はな

雜歌

冬ごもり 春さり來れば 朝には 白露置き 夕には

霞たなびく 風の吹く 木末が下に 鶯鳴くも

て、唐土・高麗と盡くしたる舞ども種多かり。樂の聲、

鼓の音、世を響かす。

垣代など、殿上人・地下も、心殊なりと世の人に思

はれたる、有職の限り整へさせ給へり。宰相二人、左

衛門督・右衛門督、左右の樂の事を行なふ。舞の師と

もなど、世になべてならぬを取りつゝ、各、籠りゐて

習ひける。木高き紅葉の陰に、四十人の垣代、言ひ知

らず吹き立てたる物の音どもに合ひたる山の松風、ま

ことの深山嵐と聞えて吹き迷ひ、いろ／＼に散りかふ

木の葉の中より、青海波の輝き出でたるさま、いと恐

しきまで見ゆ。かざしの紅葉いたう散り過ぎて、顔の

匂ひにけちされたる心地すれば、御前なる菊を折りて、

左大將挿し替へ給ふ。日暮れかゝるほどに、氣色はか

りうちしぐれて、空の氣色さへ見知り顔なるに、さる

いみじき姿に、菊のいろ／＼うつろひ、えならぬをか

ざして、今日は又なき手を盡くしたる、入綾のほどそ

ぞろ寒く、この世の事も覺えず。物見知るまじき下

人などの、木のもと岩隠れ、山の木の葉に埋れたるさ

へ、少し物の心知るは涙落しけり。

花宴

二月の二十日餘り、南殿の櫻の宴させ給ふ。后、春宮の御局、左右にして、まう上り給ふ。日にとよく暗れて、空の氣色、鳥の聲も心地よげなるに、親王たち、上達部より始めて、その道のは皆探韻賜はりて、詩作り給ふ。宰相の中將、「春といふ文字賜はれり。」と宣ふ聲さへ、例の人に異なり。次に頭中將、人の目移しもたゞならず覺ゆべかめれど、いとめやすくもて静めて、聲遣ひなどものしくすぐれたり。さての人々は、皆臆しがちに鼻白める多かり。地下の文人は、まして、御門・春宮の御才かしこく、すぐれておはします。かゝるかたにやんごとなき人多くものし給ふ頃なるに、恥づかしくて、はる／＼と曇りなき庭に立ち出づるほど、はしたなくて、やすきほどのことなれど、苦しげなり。年老いたる博士どもの、なり怪しくやつれて、例慣れたるもあはれに、さまざま御覽するなむ、をかしかりける。樂どもなどは、更にもいはず調へさせ給へり。やう／＼入口になるほどに、春の鶯囀ると

なり。日本紀に「談」といふ文字を物語と讀みたる。そを書に名づけて作れることは、「繪合」の卷に、物語の出で來始めのおやなる竹取の翁に、宇津保の俊蔭を合はせてとあれば、この竹取や初めなりけん。その物語、たが何時の世に作れりとはさだかには知られぬども、いたく古き物とも見えず、延喜などよりはこなたの物とぞ見えたる。そのほかのたゞひなる古物語ども、この源氏のより先にもかず／＼多くありきと聞えて、その名どもあまた聞えたれど、後の世には傳はらぬぞ多かんめる。又、同じ頃それより後の物も多くして、今の世にもこれかれとあまた残り。榮華物語の「煙の後」の卷に、物語合はせとて、今新しく作りて、左右かたわきて、二十人合はせなどせさせたまひて、いとをかしかりけりといへるを見れば、その頃も多く作りたりしなり。

さて、もろ／＼の物語のさま、おの／＼少しづつかはりてさまざまなれども、いづれも、昔の世にありし事を語るよしにて、あるはいさ／＼かかたちありしことをよりどころにして作りかへても書き、あるはその名

いふ舞、いとおもしく見ゆるに、源氏の御紅葉賀の折、思し出でられて、春宮、かざし賜はせて、せちに責め宣はするに、遁れがたくて、立ちて、のどかに袖かへすところを、一折れ氣色ばかり舞ひ給へるに、似るべきものなく見ゆ。「頭中將いづら。遅し。」とあれば、柳花苑といふ舞を、これは今少しうちすぐして、かゝることもやと心遣ひやしけむ、いとおもしくければ、御衣賜はりて、いと珍しきことに人思へり。上達部皆亂れて舞ひ給へど、夜に入りては、殊にけぢめも見えず。詩など講ずるにも、源氏の君の御をば講じもえやらで、句ごとに誦しの／＼する。博士どもの心にもいみじう思へり。かうやうの折にも、先づこの君を光にし給へば、御門もいかでか疎かに思されむ。夜いたう更けてなむ、事果てける。

四 源氏物語論 本居宣長

中むかしの程、物語といひて一くさの書あり。物語とは、今の世にはなしといふことにて、即ち昔はなし

をかくしもし、かへもして書き、あるはみなから作りもし、又、まれには、ありしことをそのまゝに書けるもありて、やう／＼なる中に、まづ多くは作りたるものなり。

さて、そはいかなる趣なるものにて、何のために讀むものぞといふに、おほかた物語は、世の中にありとあるよきことあしきこと、珍しきこと、をかしきこと、おもしろきこと、あはれなることなどのさまざまを書きあらはして、そのさまを繪にも書きまじへなどして、つれ／＼なるほどのもてあそびにし、又は、心の結ばほれて物思はしきをりなどのなぐさめにもし、世の中のあるやうをも心得て、もののおはれをも知るものなり。

もののおはれを知るといふこと、まづすべてあはれといふは、もと見るもの聞くものふる／＼ことに、心の感じて出づる歎きの聲にて、今の世のことばにも、「あゝ」と言ひ、「はれ」といふこれなり。例へば月花を見

て感じて、あゝみごとな花ぢや、はれよい月かななど言ふ。あはれといふは、この「あゝ」と、「はれ」との重なりたるものにて、漢文に嗚呼などある文字を、「あゝ」と讀むもこれなり。古言に、「あな」又「あや」などいへる「あゝ」も同じ。又、「はや」とも、「はも」ともいへる「は」も、かの「はれ」の「は」と同じ。又、後の世に「あつばれ」といふも、「あゝはれ」と感ずることばにて、同じことなり。

さて又、あはれと見る、あはれと聞く、あはれと思ふなどいふたぐひは、いさゝか轉じたる言ひざまにて、これは、「あゝはれ」と感じて、見聞き思ふなり。又、あはれなりといふたぐひは、「あゝはれ」と感ぜらるるよしなり。又、あはれを知る、あはれを見ず、あはれにたへずなどいふたぐひは、すべて何事にまれ、「あはれ」と感ぜらるゝさまを名づけて、あはれといふものにしていへるにて、必ず「あゝはれ」と感ずべきことにあたりては、その感ずべき心はへをわきまへ知りて感ずるを、あはれを知るとはいふなり。又、ものあはれといふことも、もと「あゝはれ」と感ずること

となり

又、後の世には、あはれといふに哀の字を書きて、唯、悲哀の意とのみ思ふれど、あはれは悲哀の意には限らず、うれしきにも、おもしろきにも、たのしきにも、をかしきにも、すべて「あゝはれ」と思はるゝは、みなあはれなり。されば、あはれにかしくとも、あはれにうつくしくとも、つらねていへり。そはをかしきにもうれしきにも、「あゝはれ」と感じたるを、あはれにといへるなり。但し又、をかしきうれしきなど、あはれをむかへていへることも多かるは、人の心のさまゝに感ずる中に、うれしきこともおもしろきことなどには、感ずること深からず、唯悲しきこと、うきこと、戀しきことなど、すべて心に思ふにかなはぬすぢには、感ずることよなく深きわざなるが故に、しか深き方をとりわきて、「あはれ」といへるなり。世に悲哀をのみいふもその心ばへなり。

きことにまれ、心の動きて、「あゝはれ」と思はるゝは、みな感ずるにて、あはれといふことばによく當れる文字なり。漢文に「感<sup>セン</sup>鬼神<sup>クワン</sup>」とありて、古今集の眞名序にもしか書かれたるを、假名序には「おに神をもあはれと思はせ」と書かれたるにて、あはれは物に感ずることなるを知るべし。おほかたあはれといふことのもと、又移りて使ひたるやうなど、上の件にて心得べし。

かくて又、ものあはれといふも同じことにて、「もの」といふは、言ふを物言ふ、語るを物語る、物詣で、物見、物忌みなどいふたぐひの「もの」にて、ひろく言ふ時に添ふることばなり。さて、人は何事にまれ、感ずべきことに當りて、感ずべき心を知りて感ずるを、ものあはれを知るとはいふを、必ず感ずべきことにふれても、心動かず、感ずることなきを、ものあはれ知らずと言ひ、心なき人とはいふなり。ものわきまへ心ある人は、感ずべきことには、おのづから感ぜではあらぬわざなるに、さもあらぬは、何とも思ひわくかたなくて、必ず感ずべき心知らねばぞかし。

さて、人の心の物に感ずることは、上にも言へる如く、さまざまなるを、この物語は殊に人の感ずべきことの限りを、さまざま書きあらはして、あはれを見せたるものなり。まづ、おほやけわたくし、おもしろく、めでたく、いかめしきことの限りを書き、又春夏秋冬をり／＼の花鳥月雪のたぐひを、をかしきさまに書きあらはせるなど、これみな人の心を動かす、あはれと思はするものにて、心に思ふことある時は、殊に空のけしき本草の色も、あはれをもよほすくさはひとなるわざなり。

三

そも紫式部が本意、とにかくにものあはれを知るをむねとはして、知らざるがいふかひなきことはさらにもいはず、又、そを知りたるふるまひの過ぎたるも、あぢきなくよからぬことにて、そのことのすぢによりては、必ずあだなるかたに流れやすきわざなれば、心には深く思ひ知りて、そのよきほどを思ひめぐらして、あらはしふるまふべきすぢもあること、上の

件に引き出でたる卷々のことどもを考へわたして知るべし。これぞこの物語のおほむねなりける。

さて、そは作りぬしの、みづからすぐれて深くものあはれを知る心に、世の中にあることのあるりさま、よき人あしき人の心しわざを、見るにつけ、聞くにつけ、ふるゝにつけて、その心をよく見知りて、感ずることの多かるが、心のうちに結ばれて、しびこめてはやみがたきふしゝを、その作りたる人の上によせて、くはしくこまかに書きあらはして、おのがよしともあしとも思ふすぢ、言はまほしきことどもをも、その人に思はせ言はせて、いぶせき心をもらしたるものにして、世の中のものあはれの限りは、この物語に残ることなし。

さて、これを読む人の心に、げにさもあらんと深く感ぜしめんために、何事にもことさらに深くいみじく書きなしたり。かゝれば、この物語を読むは、紫式部にあひて、まのあたりかの人の思へる心ばへを語るをくはしく聞くにひとしく、又、物語の中に見えたるよきあしき人のしわざ心のおもむきをよく考へみれば、

いれたりとは見ゆるものから、こよなくおとれり。そのほかもみな異なることなし。唯、この物語ぞこよなく、殊に深く、よろづに心をいれて書けるものにして、すべて文ことばのめでたきことはさらにも言はず、世にふる人のたゝすまひ、春夏秋冬をりゝの空のけしき、木草のありさまなどまで、すべて書きまめでたき中にも、男女、その人々のけはひ心ばせを、おのゝことゝに書き分けて、ほめたるさまなども、みなその人々のけはひ心ばへに従ひて、ひとやうならずよく分れて、うつゝの人にあひ見る如くおしはからるゝなど、おぼろげの筆のかけても及ぶべきさまにあらず。さて又、よろづよりもめでたきことは、まづからぶみなどは世にすぐれたりといふも、世の人のことにふれて思ふ心のありさまを書けることは、たゞ一わたりのみこそあれ、いとあらく淺きものなり。すべて人の心といふものは、からぶみに書けるごと、ひとかたにつききりなるものにはあらず、深く思ひしめることに當りては、とやかくやと、くだゝしくめ、しく亂れあひて、定まりがたく、さまざまのくま多かるもの

しかゝの物を見聞きたる時の心は、かやうなるもの、しかゝの事にあたりたる時の心は、かやうなるもの、よき人のしわざ心はかやうなるもの、わるき人はかやうなるものとやうに、すべて世の中のありさま、なべて人の心の奥のくまゝまでいとよく知られて、もののこゝろをわきまへ知りて、からぶみにいはゆる人情世態によく通せんこと、この物語を読むにしくものあらじとぞ覺ゆる。

四

こゝらの物語書どもの中に、この物語は殊にすぐれてめでたき物にして、おほかた先にも後にもたぐひなし。まづこれより先なる古物語どもは、何事もさしも深く心をいれて書けりとしも見えず、たゞ一わたりにて、あるはめづらかに興あることをむねとし、おどろおどろしきさまのこと多くなどして、いづれもいづれも、ものあはれなるすぢなどは、さしもこまやかに深くはあらず、又、これより後の物どもは、狭衣などは、何事も、もはらこの物語のさまをならひて、心を

なるを、この物語にはさるくだゝしくまゝまで、残るかたなく、いとくはしく、こまかに書きあらはしたること、曇りなき鏡にうつして向かひたらんが如くにて、おほかた人の心のあるやうを書けるさまは、やまともろこし、いにしへ今ゆくさまにも、たぐふべき書はあらじとぞ覺ゆる。又、すべて卷々の中に、珍しくおどろおどろしく、めさむるやうのことはをさをさなくて、初めより終りまで、唯世の常のなだらかなることの、同じやうなるすぢをのみいひて、いと長き書なれども、讀むにうるさく覺ゆることなく、うむことはなくて、唯續きゆかしくのみぞ覺ゆるかし。おのれ教へ子どものために、早くよりこの物語を讀み説きて聞かすこと、あまたかへりになりぬるを、あだし書どもは、かばかり長からぬだに、説くにうむ心もまじるを、これはさしも長き書にて、年月をわたれども、いさゝかもうむ心出で來ず、たびごとに改めて讀みたらんこゝちして、珍しくをかしく覺ゆるにも、いみじくすぐれたるほどは知られて、かへすがへすめでたくなん。



五 白良の濱

催馬樂

紀伊國

紀伊國の白良の濱に、

眞白良の濱に、

ありぬる鷗、はれ、

その玉持て來。

風しも吹いたれば、

餘波しも立てれば、

水底霧りて、はれ、

その玉見えず。

難波の海

難波の海、難波の海、

漕ぎもて上る小舟・大舟。

筑紫津までに、

いさ少し上れ、

梁塵秘抄

山崎までに。

岩もる水

松の木陰に立ち寄りて、

岩もる水をむすぶ間に、

扇の風も忘られて、

夏なき年とぞ思ひぬる。

遊ぶ子供

遊びをせむとや生まれけむ、

たはぶれせむとや生まれけむ。

遊ぶ子供の聲聞けば、

わが身さへこそゆるがるれ。

六 水屋の働仕事き

「喫茶餘録」に、「茶の湯すぎてやはらぐ時にこそ上手下手はあれ。」と言つてある。茶をたてる間は、大事に思ふ心の張りによつて粗相はないが、道具を水屋に

取り入れて、心に弛みが生ずる時に過ちやすい。水屋の清は客前の清であり、客前の敬は水屋の敬でなければならぬ。

水屋の働きは、清と敬とを第一とする。これを趣に出すものは水屋飾りで、これを働きに出すものは洗ひである。水屋飾りとは、水屋の棚の飾り附けのことである。軽きは上に、重きは下に、乾きたるを上に、潤ひたるを下に、器物の安定を専らとして、下は浅くとも、上は奥深く置くを習ひとする。洗ひには水を惜しまず、しかも、その水を粗末にしてはならない。「水を惜しみて水を惜しまず。」といふを法とする。總べての茶器を洗ひ清めて飾り附けることから、再び洗ひ清めて元の如くに片附けるまで、この清淨をほかにして水屋の働きはない。

水屋でする用意を仕込みといふ。棗や茶入れには盛り砂のやうに茶を山形に仕込むのがよいとせられてゐる。これを盛るには、客に見える見えぬに拘らず、わが心に満足するまで、正しくきれいに入れる。これが敬である。茶杓の柄の抜けぬやう、竹の蓋置の割れぬ

やう、あらかじめ水に漬けておくのも、敬の働きにほかならない。又、膳につけた箸・串等の潤ひは、洗ひ上げた主人の心入れをしのばせて、心地よいものである。水指に水を入れ、茶椀に茶巾・茶釜・茶杓を仕込み、建水に蓋置・柄杓を仕込むなど、そのいづれにも敬と清とが籠らねばならぬ。これが仕込みの要である。茶席で饗する食事を懐石といふ。懐石とは温石を懐にして寒さを凌ぐの意で、唯、飢ゑを醫すれば足るの義である。故に、懐石には太牢の珍味を並べる必要はない。一汁一菜で十分である。一體、馳走とは材料の如何をいふのではない。これを作り、これをすゝめんがために主人が奔走するの謂であつて、主人みづからこれを作り、みづからこれを運んで客に供するのが、眞の馳走である。

これを作るには、道元禪師の教へられた如く、喜・老・大の三心を以つてせねばならぬ。喜心とは喜悅心である。喜びてなすの謂である。今わが作るころのもの、客の聖胎を養ひ、道芽を長ずる所以であると観する時、われ知らず心の底から湧き出づる歡喜の心であ

る。老心とは老婆心切の心である。聖胎を養ひ、道芽を長ぜしむるものなるが故に、「一粒の米もこれをちろそかにすることなく、一莖の菜もこれをゆるがせにすることのない心である。大心とは、物を追うて心を變ぜず、人によつて思ひを改めず、大山の高く大きく、大海の廣く深きが如く、偏なく黨なきの心である。この三心の運用によつて作り上げられた一汁一菜こそ、眞に尊ぶべき馳走である。徒らに材料の珍しきを選び、その調理に奇を弄するには及ばぬ。唯、その配合や火加減に心を籠め、物の眞味を損ぜぬやう、苦・酸・甘・辛・鹹の五味がよく調和せられ、輕軟・淨潔・如法作の三徳を備へれば申し分はない。

「典座教訓」に、「典座は絆を以つて道心となす。」と言はれてある。典座とは僧堂で調理番のことをいふのである。絆とは襷のことであるが、又、煩瑣な仕事の意味をも含んでゐる。絆を以つて道心と觀じ、絆によつて道心が養はれると喜ぶ心は、やがて水屋に働く主人の心でなければならぬ。材料の精選、用具の使用、共に淨潔・如法であり、客もまた凡眼を以つて見ず、

ひきかへひきかへ、何さまにてもこれあるべく、所作・飾り・置合はせの珍しきことは、快からざる會にて候。」と奥書さして返した。「同事ばかりの内、心の働きはひきかへひきかへ」とは尊い教へである。これをそ貴賤・貧富によつて別なき水屋の働きである。

主人の敬に對して、客もまた敬を忘れてはならぬ。これが即ち客ぶりである。客は、第一に、主人の馳走ぶりに目をつけ、材料や調味よりも、その心盡くしの眞味を味はふべきである。第二には、自己の姿に心を注ぎ、賤しき食ひごまをせず、時宜の挨拶を忘れず、一々の動作を敬の現れとしなくてはならない。食事に際しての作法は、唯、客たるがために學ぶの要があるのではなく、日々三度の食を人間らしく取り得んがためである。

臺所の仕事は、決して低い仕事ではない。道念を長じ、聖胎を養ふの源こゝにありと悟れば、その意義は重く且つ大きい。さうして、この仕事を深い意味の世界に導いて、眞に價値あらしめるものは、この三心である。親をしてその壽を全うさせる子の心盡くしもこ

凡情を以つて察せず、常の食物なれども、常の食物とせぬところに、主客相和の敬が籠る。この心を材料に移せば、材料に對する敬である。廣大無邊なる自然の力、天地の恩及び幾多の人々の勞苦に思ひ到る時、一粒一莖をも粗末にしてはならないと氣がついて、「これを護惜すること眼睛の如くせよ。」といふ誠めがしみじみ尊く感ぜられる。

主人は客に奉ずるを知つて貧を憂へず、唯、眞實心・敬重心を以つてこれに對する。これが主人ぶりである。いはゆる「多虚は少實にしかず。」である。土井利勝、一日、庵を拂つて客を招いた。客は定刻に參邸した。主人利勝は殷懃にこれを迎へ、庵に導き、蕎麥饅頭十ばかりを入れた重箱を出した後、みづから茶をすゝめ、閑談時を移して會を終へた。茶會はそれで十分である。

宗啓が利休の日記を抜き書きして、その校閲を乞うた時、「毎會のうち、品變りたるばかりを御書き抜き候事、心を得ず候。面上にて御思慮承るべく候。くれぐれ相變ることなく、日々同事ばかりの内、心の働きは

こにあり、夫をしてその天職を果させる妻の心盡くしもこゝにあり、又、わが子をしてその大志を貫徹させる母の心盡くしもこゝにある。

(奥田正造ノ文ニ據ル)

七 年來稽古

世阿彌

七 歳

この藝に於いて、大方、七歳をもて初めとす。この頃の能の稽古、必ずそのもの自然としいだすことに、得たる風體あるべし。舞・働きの間、音曲、もしくは怒れることなどにもあれ、ふとしいださんかゝりを、まづ打ち任かせて、心のまゝにせさすべし。さのみ善き惡しきとは教ふべからず。あまりにいたく諫むれば、童は氣を失ひて、能ものぐさくなりたちぬれば、やがて能は止まるなり。

十二三より

この年の頃よりは、はややう／＼聲も調子にかゝり、能も心つく頃なれば、次第次第に物數をも教ふべし。

まづ童形なれば、何としたるも幽玄なり。聲も立つ頃なり。このたよりあれば、悪きことは隠れ、善きことは愈々花めけり。

大方、兒の猿樂に、さのみ細かなる物真似などは、せさすべからず。當座も似合はず、能も上らぬ相なり。たゞ、堪能になりぬれば、何としたるもよかるべし。兒といひ、聲といひ、しかも上手ならば、何かは悪かるべき。

さりながら、この花は誠の花にはあらず。唯時々の花なり。されば、この時分の稽古、すべて易きなり。さる程に、一期の能の定めには成るまじきなり。

この頃の稽古、易きところを花にあてて、わざをば大事にすべし。働きをもたしやかに、音曲をも文字にさはさはとあたり、舞をも手を定めて大事に稽古すべし。

十七八より

この頃は、又、あまりの大事にて、稽古多からず。まづ、聲變りぬれば、第一の花失せたり。體も腰高になれば、かゝり失せて、過ぎし頃の聲も盛りに、花やか

て、人も目に立つるなり。もと名人などなれども、當座の花に珍しくして、立合勝負にも一旦勝つ時は、人も思ひ上げ、主も上手と思ひ始めるなり。これかへすがへす主のため仇なり。これも誠の花にはあらず。年の盛りと、見る人の、一旦心の珍しき花なり。まことの目利きは見分くべし。

この頃の花こそ初心と申す頃なるを、究めたるやうに主の思ひて、はや猿樂にそばみたる論説をし、至りたる風體をすること、あさましきことなり。たとひ、人もほめ、名人などに勝つとも、これは一旦珍しき花なりと思ひさとりて、愈々物真似をも直ぐにしだめ、尙、得たらんに、事を細かに問ひて、稽古をいや増しにすべし。されば、時分の花を誠の花とする心が、眞實の花に尙遠ざかる心なり。唯、人ごとにこの時分の花に迷ひて、やがて花の失するをも知らず。初心と申すは、この頃のことなり。一公案して思ふべし。

わが位の程をよく／＼心得ぬれば、それほどの花は一期失せず。位より上の上手と思へば、もとありつる位の花も失するなり。よく／＼心得べし。

にやすかりし移りに、手だてはたと變りぬれば、氣を失ふ。結句、見物衆にもをかしげなる氣色見えぬれば、恥づかしさと申し、かれこれ／＼にて退屈するなり。

この頃の稽古には、唯指をさして人に笑はるゝとも、それをば願みず、内にては、聲の届かん調子にて宵曉の聲を使ひ、心中には願力を起して、一期の堺今なりと、生涯にかけて能を捨てぬよりほかは、稽古あるべからず。こゝにて捨つれば、そのまゝ、能は止るべし。

總じて、調子は聲によるといへども、黄鐘・鸞鏡まてを用ふべし。調子にさのみかゝれば、身なりに癖出で来るものなり。又、聲も年寄りて損ずる相なり。

二十四五

この頃、一期の藝能の定まる初めなり。さる程に、稽古の堺なり。聲も既に直り、體も定まる時分なり。されば、この道に二つの果報あり。聲と身なりなり。これ二つは、この時分に定まるなり。歳盛りに向かふ藝能の生ずるところなり。

さる程に、よそ目にも、すは上手出て來たりたりと

三十四五

この頃の能、盛りの極なり。こゝにてこの條々を究めさとりて、堪能になれば、さだめて天下に許され、名望を得つべし。もし、この時分に、天下に許されも足らず、名望も思ふほどもなくば、いかなる上手なりとも、未だ誠の花を究めぬ仕手と知るべし。もし究めずば、四十より能はさがるべし。それ、後の證據なるべし。さる程に、あがるは三十四五までの頃、さがるは四十以來なり。かへすがへすこの頃天下の許されを得ずば、能を究めたりとは思ふべからず。

こゝにて、なほ慎しむべし。この頃は過ぎし方を覚え、又行く先の手だてをもさとする時分なり。この頃究めずば、この後天下の許されを得んこと、かへすがへす難かるべし。

四十四五

この頃よりの手だて大方變るべし。たとひ天下に許され、能に得法したりとも、それにつけても、よき脇

の仕手を持つべし。能はさがらねども、力なく、やうやう年開け行けば、身の花も、よそ目の花も失するなり。まづ、すぐれたらん美男は知らず、よき程の人も、直面の猿樂は、年寄りては見えぬものなり。さる程に、この一方は缺けたり。

この頃よりは、さのみ細かなる物真似をばすまじきなり。大方似合ひたる風體を、やすくと骨を折らで、脇の仕手に花を持たせて、あひしらひのやうに、すくなすくなとすべし。たとひ、脇の仕手ならんにつけても、愈々細かに身を碎く能をばすまじきなり。何としてもよそ目花なし。もし、この頃まで失せざらん花こそ、誠の花にてはあるべけれ。そは、五十近くまで失せざらん花を持ちたる仕手ならば、四十以前に天下の名望を得つべし。たとひ、天下の許され得たらん仕手なりとも、さやうの上手は、殊にわが身を知るべければ、なほく脇の仕手を嗜み、さのみ身を碎きて、難の見ゆべき能をばすまじきなり。かやうにわが身を知る心、得たる人の心なるべし。

五十有餘

この頃よりは、大方せぬならでは手だてあるまじし。麒麟も老いては驚馬に劣ると申すことあり。さりながら、眞に得たらん能者ならば、物数はみなく失せて、善悪見所は少くとも、花は残るべし。

亡父にて候ひし者は、五十二と申し、五月十九日死去せしが、その月の四日の日、駿河國淺間の御前にて法樂仕り、その日の猿樂、殊に花やかにて、見物の上下、一同に褒美せしなり。凡そ、その頃物敷をば、はや初心に譲りて、やすきところをすくなすくなといろひてせしかども、花はいやましに見えしなり。これ誠に得たりし花なるが故に、能は枝葉も少く、老木になるまで、花は散らで残りしなり。これ、まのあたり老骨に残りし花の證據なり。

八 一筋の道

わが生くべき道はたゞ一筋である。その一筋の道を迷ひなく見出し、たゆみなく進み行くことに、あらゆ

る生活の意義は盡きてゐるのではなからうか。蜂や鳩の或る種のは、非常に遠い距離から誤りなく自分の巢に歸つて来る。それは本能の神祕とされてゐる。まことにあの小さな蜂がまだ一度も通つたことのない遠い道を、眞直に飛び歸つて行くことを知つた人は、唯その不思議な力に感ずるのみである。しかし、人はそれよりもつと高い本能をもたないであらうか。われわれはそれを本能と呼ぶ代りに叡智と呼んでゐる。人の叡智はわが進むべき一筋の道を見出すために、蜂の本能よりも劣るはずはないのである。しかもわが歩いて來た跡を靜かに思ふ時、悔いなくしてこれを顧み得る人は幾ばくあるであらう。

芭蕉は「笈の小文」の冒頭に自分の生涯を回顧して、「遂に無能無藝にして唯この一筋につながらる。」と言つた。又かの「幻住庵記」の終りにも、「つらく年月の移り來し拙き身の科を思ふに、或る時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛龕祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯のはかりごととさへなれば、遂に無能無才

にしてこの一筋につながらる。」と述懐してゐる。この一筋とはいふまでもなく、かれが生涯を託した風雅の道である。かれはみづから無能無藝と言つてゐるけれども、例へばその最初の撰集たる「貝おほひ」を一見した人は、かれがいかに才氣に富む青年であつたかを知るのであらう。さうした才のまゝに進むには、實に多くの誘惑が前途にあつたに違ひない。「仕官懸命の地」はかれの才によつて、必ずしもから得られないものではなかつた。しかも、かれは遂にその才藝を信ずることができなかつたのである。みづから生くべき道は決してそこにはなかつた。それを芭蕉の叡智は明らかに知り、さうして迷ふことなく進んで行つた。

芭蕉の選んだ一筋の道は、まことにかれに與へられた唯一の生くべき道だつたのである。それを誤りなく、かれは見出すことができた。浪華の客舎に夢は枯野を駆けめぐりながら、これさへ妄執と觀じつゝも、「風雅の上に死なん身の道を切に思ふなり。」と言つた。この妄執と共に一生を終ることは、實にかれの願ひであつたのだ。今やかれは悔いなき安らかな心で、靜か

に死と面することを得たであらう。けれども、それまでに芭蕉の經て來た道が、いかに險難なものであつたかを忘れてはならない。貞門・談林から出て蕉風を樹立するに至るまでの努力は並み／＼ではなかつた。しかし蕉風への轉移はいはば時代の一つの流れでもあつた。芭蕉はその流れが俳諧の最も正しい展開であることを認めて、その勢に乗じたといつてもよいのである。だから、かれが眞に詩に瘦せねばならなかつたのは、寧ろ既に樹立し得た蕉風そのものの中にあつて、いかにして不斷の新しさを求むべきかといふ問題に逢着して後のことであつた。晩年に至つて提唱した輕みの俳諧は、實にこの烈しい苦惱の中から生まれたものである。

「或る時は倦んで放擲せんことを思ひ、或る時は進んで人に勝たんことを誇り、是非胸中に戰うて、これがために身安からず。」芭蕉は「笈の小文」の中に自分の過去をかう顧みてゐる。この一筋の道につながるために、かれはかうした苦闘を経て來たのである。しかも道に入つて道はなほ分れる。常に利害を破却して進

まなければ、道は再び一筋の外に出てしまふであらう。そこに一時の懈怠をも許さぬのである。芭蕉は寂の理念を確立することに依つて、日本文藝の傳統精神を見事に俳諧の中に生かすことができた。こゝに俳諧の不易の道は見出されたわけであるが、物に應じ時に隨ふ風雅の變を知らなければ、寂はやがて單なる形骸に化し去るであらう。「猿蓑」に蕉風の圓熟した姿を誇り得た時、既に芭蕉の心には一つの惱みがさざしてゐた。それはいふまでもなく俳諧の變に正しく應ずべき新たな工夫であつた。或る時は俳諧を全く放下し去らうとし、或る時は門を閉ぢ客を謝して、人と絶たうとした頃の芭蕉を思へば、當時のかれの焦慮がいかに烈しかつたかは知られる。かうしてかれが最後に到り着いたのは、「高く心を悟りて俗に歸るべし。」の境地であつた。輕みの俳諧は即ちこの境地から生まれたものであつた。

芭蕉が歩いた一筋の道は、結局輕みの境地に到るためのものであつたといつてよい。かれの風雅はこゝに完成されたのである。しかし今われ／＼はその完成ヒ

あつたのだ。

(額原退藏ノ文ニ據ル)

た姿を仰ぐよりは、完成への一步一步の跡を深く考へてみたい。芭蕉は門人を教へるのに、屢々「誠を勤むる」といふ言葉を口にした。誠とは風雅の誠である。それを勤めるとは、風雅の不斷の實踐を意味する。いはば行住坐臥、風雅の精神を忘れぬことである。かうした實踐に依つてのみ俳諧は常に新たであることを得る。芭蕉の教へを最も忠實に傳へた「三冊子」には、「變化に移らざれば風あらたならず。これに押し移らずといふは、一旦の流行に口實、時を得たるばかりにて、その誠を勤めざる故なり。勤めず心をこらさざる者、誠の變化を知るといふことなし。唯、人にあやかりて行くのみなり。勤むるものはその地に足を据ゑかたく、一步自然に進む理なり。」と記されてある。寂もしをりも、さうして輕みも、即ちこのやうな一步一步の進みの中に見出されたものであつた。風雅の誠とは、「造化にしたがひ四時を友とす」ることである。だから、誠を勤めるとは、絶えず私意を去つて自然に隨順しようとする努力にほかならぬ。芭蕉の一生は、實にこの隨順のために誠を勤める人の歩いた尊い足跡で

# 文法篇 (文の構造と種類)

## 一 文節の構造

〔二〕(甲) 雨の降り方だけでも 實に 色々様々の降り方が あつて、それを 區別する 名稱が、それに 應じて 分化してゐる 點でも、日本は 恐らく 世界中 隨一では ないかと 思ふ。 試みに、

「春雨」「五月雨」「しぐれ」の 適切な 譯語を 外國語に 求めると したら、 相應な 困惑を 經驗するであらうと 思はれる。

(乙) 沈黙の 冬は 去れり。しかも、春なほ 甚だ 淺し。梅は 未だ 咲かず。蕾 おしなべて 固し。されど、南を受けたる 崖下など、たま〜 白梅の 數輪 咲きそめたるを 見る。(文語)

問題一 右の例文の各文節を單語に分け、且つ

自立語と附屬語とを區別せよ。

〔二〕 右の例文によつても明らかやうに、文節は一つの單語で出来てゐるものもあり、二つ以上の單語で出来てゐるものもある。前者は自立語だけで出来てをり、後者は、自立語に附屬語が一つ又は二つ以上附いて出来てゐる。

〔三〕 自立語だけで出来てゐる文節には、次のやうなものがある。

(甲) 用言だけで

(イ) 月が 照る。

思ひ出は なつかしい。

氣候 溫暖なり。(文語)

(ロ) 家を 重んじ、祖先を 尊ぶべし。(文語)

夏は 涼しく、冬は 暖かださうだ。

雪 深く 積れり。(文語)

穩かに 話した。

雨 沛然と 降りぬ。(文語)

(ハ) 賞すること 大方ならず。(文語)

かなたに 美しき 城 見えたり。(文語)

懇切な 訓辭が あつた。

炎々たる 火勢、夕闇を こがせり。(文語)

(ニ) 波が 静かなら 舟を 出さう。

(ホ) 元氣を 出せ。 汝、國の ため つゝがなかれ。(文語)

意氣は 昂然たれ。(文語)

(ハ) おゝ、結構、結構。

あゝ、いた(痛)。

問題二 以上の各文節は、用言のどんな活用形、又はどんな形を用ひてゐるか。

(乙) 體言だけで

月 明らかに、星 稀なり。(文語)

毎日 島へ 出る。

弟子の 僧 二人 ありけり。(文語)

汝、臆したるか。(文語)

(丙) 副詞だけで

ゆつくり 歩く。

やをら 立ち上りぬ。(文語)

(丁) 連體詞だけで

文法篇

これ、いはゆる 黒潮なり。(文語)

たつた 一人、後に 取り残された。

(戊) 接續詞だけで

秋の 空は 實に 高い。さうして 色が 深い。

通信には 電信 及び 傳書鳩を、使用せり。(文語)

(己) 感動詞だけで

はい、承知しました。

あな、樂し。(文語)

〔四〕 自立語に附屬語が附いて出来てゐる文節には、次のやうなものがある。

(甲) 用言に

(イ) 決して 忘れるな。

八時に 登校すべし。(文語)

あら、勇ましや。(文語)

随分 きれいださうだ。

(ロ) 利を 追はず、名を 求めず。(文語)

さぞ おもしろからう。

近くば、直ちに 駆けつけよ。(文語)  
進歩も 速かならむ。(文語)

(ハ)もう 客は 歸つた。

花 摘みに 行く。(文語)

細くて 急な 道が 続く。

風雷 烈しかりけり。(文語)

(ニ)手に 取るやうに 見える。

強きを 挫き、弱きを 助く。(文語)

四邊の 静かなるが、いと 快し。(文語)

(ホ)遂に 大學者と なれり。(文語)

慢心を 起せば、進歩は 止る。

(ヘ)進めや、者ども。(文語)

この 豊かなる 稔りを 見よかし。(文語)

(ト)非常に おもしろさうだ。

高原の 朝は 爽かです。

問題二 以上の各文節は、用言のどんな活用形、又はどんな形を用ひてゐるか。

(乙)體言に

火山が 煙を 吐いた。

問題四 右は助動詞が幾つ重なつてゐるか。

(乙)助詞が重なる

海流には、暖かいのと、冷たいのとが、ある

考ふる ところ なきにしも、あらず。(文語)

問題五 右は助動詞は幾つ重なつてゐるか。

(丙)助動詞と助詞が重なる

春 來たりなば、病も 快からむ。(文語)

直ぐ 出掛けたが、すこし 遅かつた。

これは 私のです。

過ぎたるは、なほ 及ばざるがごとし。(文語)

猫の 手も 借りたいくらゐだ。

問題六 この章の始めの例文に就いて、二つ以上の

の單語で出来てゐる文節を取り出し、どんな品詞で出来てゐるかを明らかにせよ。

二 文節と文節との關係

〔一〕 文節は、これを唯並べただけでは意味をなさない。

五。一定の關係に従つて並べて、始めて意味をなす。

その關係には、幾つかの種類がある。

汝も、日本男子なり。(文語)  
全く 完成だ。

われこそ、齋藤實盛よ。(文語)

(丙)副詞に

忽ちに 復興した。

しばしの 別れを 惜しむ。(文語)

目的地は まだだ。

(丁)連體詞に

このね、本が それなんだよ。

(戊)接續詞に

それにね、先生も 御出席に なつたよ。

(己)感動詞に

いでや、目に 物 見せむ。(文語)

〔五〕 自立語に附く附屬語は幾つか重なることがある。

(甲)助動詞が重なる

一步も 退かうとは しませんでした。

われらは 誠實の 人たらざるべからず。

(文語)

〔三〕

花が 咲く。

風が 涼しい。

あれが 槍岳だ。

右の文に於ける二つの文節は、それ／＼、何がどうするか、何がどんなであるか、何が何であるかを示してゐるのであつて、これら二つの文節は、いづれも主語述語の關係で連なつてゐる。どうするか、どんなであるか、何であるかに當るものを述語、何がに當るものを主語といふ。

問題一 右の例の各文節が、どんな品詞で出来て

ゐるかを調べよ。

かれも 孝子なり。

鳥だに 鳴かず。

雨さへ 多し。

汝 何者ぞ。

新しきが よし。

花の 散るを 眺めぬ。

頭腦 鋭敏に、意志 強固なり。

言ふは 易く、行なふは 難し。

笑はるるぞ 恥づかしき。  
沈着なるこそ 肝要なれ。

右の例の二つの文節も、それ／＼主語述語の関係で連なつてゐる。

問題二 右の例の主語及び述語が、どんな品詞で出来てゐるかを調べよ。

出来てゐるかを調べよ。  
問題三 右の例を口語に改めて、その主語及び述語がどんな品詞で出来てゐるかを調べよ。

【四】 風が 大變 涼しう。  
赤い 花が 咲く。

右の文に於ける「風が」と「涼しう」、「花が」と「咲く」とは、それ／＼主語述語の関係で連なつてゐる。ところが、「大變」「赤い」は、「涼しう」「花が」に連なつて、どんなに涼しいか、どんな花であるかを示して、「涼しう」「花」の意味を限定してゐる。即ち、これら二つの文節は、修飾被修飾の関係で連なつてゐる。「大變」「赤い」のやうなものを修飾語、「涼しう」「花が」のやうなものを被修飾語といふ。

問題四 右の例の修飾語及び被修飾語が、どんな

蛹が 蛾と なる。

右の例の二つの文節も、それ／＼修飾被修飾の関係で連なつてゐる。

問題五 右の例の修飾語及び被修飾語が、どんな品詞で出来てゐるかを調べよ。

右の例の修飾語のやうに、用言を修飾するものを連用修飾語といふ。

【六】 (甲) 或る 夜。俄かに 出發せり。(文語)  
この 樹には 小さな 實が 生る。

(乙) 躍る 心を 押し静めた。  
睦まじき 友。一人 あり。(文語)

けなげなる 少年なりき。(文語)  
働かない 者は 一人も ゐない。

(丙) 北の 風。吹く。(文語)  
今日までの 成績は 極めて よい。

誰が 宿なりや。(文語)  
たま／＼の 面會が 待ち遠しい。  
あもしろの 景色よ。(文語)

右の例の二つの文節も、それ／＼修飾被修飾の関係

品詞で出来てゐるかを調べよ。  
【五】 (甲) 道 頗る 峻し。(文語)

夜來の 雨は からりと 霽れた。  
(乙)(イ) 千鳥の 聲 遠く 聞えつ。(文語)

寂しくも 思はず。(文語)  
熱心に 勉強した。

(ロ) 言はぬは 言ふに まさる。(文語)  
寒いのを 我慢する。

憂ひは 豫め 憂へざるより 起る。(文語)

(ハ) 驚いて 立ち上つた。  
苦しうとも 忍耐せよ。(文語)

(丙)(イ) 約 二米 陥没せり。(文語)  
試験は 昨日 終つた。

(ロ) 飛行機は 東へ 向かふ。  
かれは 詩に 巧みなり。(文語)

昆虫を 捕へる。  
千里の 道も 一歩より 始る。(文語)

で連なつてゐる。

問題六 右の例の修飾語及び被修飾語が、どんな品詞で出来てゐるかを調べよ。

右の例の修飾語のやうに、體言又はこれに附屬語の附いた文節に連なつて、體言を修飾するものを連體修飾語といふ。

【七】 山は 高くて 峻し。

穩かで 謙讓な 人で あつた。  
智と 徳とを 兼ね備へた 偉人で ある。

右の文の二つの文節は、主語述語の関係でもなく、修飾被修飾の関係でもない。二つの文節が對等の関係で連なつてゐる。これを對等の関係にある文節と

いふ。

問題七 右の例の對等の関係で連なる文節が、どんな品詞で出来てゐるかを調べよ。

【八】 (甲) 稻は 發育し 稔れり。(文語)  
園内は 廣くして 美し。(文語)  
赤く 美しい 花が 咲いた。  
穩健で 適切な 説です。



(乙) 米、生糸、杉材は、この地方の重要

産物である。

秀吉、家康、利家を招く。(文語)

忠臣、孝子の事蹟を見よ。(文語)

繪畫と彫刻の展覧會がある。

視察團は今日か明日に到着する。

あれとこれと、どちらがよいか。

右の例の二つの文節も、それ／＼對等の關係で連なつてゐる。

問題八 右の對等の關係で連なる文節が、どんな

品詞で出来てゐるかを調べよ。

〔九〕 電燈は消えてゐる。

まことに尊いのは、母の力である。

右の文の二つの文節のうち、上の文節が主たる意味を表し、下の文節はこれに附屬して、或る意味を添へてゐる。これは用言と助動詞との關係に似てゐる。これを附屬の關係にある文節といふ。

問題九 右の例の附屬の關係で連なる文節が、ど

んな品詞で出来てゐるかを調べよ。

(甲)

弟は眠つてしまつた。

あけてある。戸は、みんなしめて

くださる。

氣候も悪くはな。

それは確かだ。ございます。

論旨も明白にはあらず。(文語)

御名こそ承りたく候へ。(文語)

(乙) それは生やさしい仕事ではなかつた。

恩を知らざる者は人にあらず。

(文語)

右の例の二つの文節も附屬の關係で連なつてゐる。附屬の關係で連なる二つの文節は、その間に他の文節を挿むことは極めて稀であつて、この二つの文節がいつも殆ど一つの文節のやうに用ひられる。

問題十 右の例の附屬の關係で連なる文節が、ど

んな品詞で出来てゐるかを調べよ。

〔十一〕 (甲) さあ、もう一息だ。

はい、私も参りませう。

問題十一 右の例の獨立語の文節が、どんな品詞で

出来てゐるかを調べよ。

問題十二 次の文の傍線を引いた文節と文節とは、

どんな關係にあるか。

(一) 湯が水になる。

(二) 樺太犬は、恐しく元氣がよい。

(三) かれは畫家で詩人だつた。

(四) そこに植ゑてゐるのは茄子だ。

(五) 途中での出来事を話して、ごらんなさ

な。

(六) 落花は、蝶の舞ふに似たり。(文語)

(七) 姫路城は、世界に誇るべき國寶なり。

(八) あつばれ、運の盡きぬるやつばらか

な。(文語)

### 三文の構造

〔一〕 文は文節から出来てゐる。

美しい花咲く。(文語)

(乙) 米、生糸、杉材は、この地方の重要

産物である。

秀吉、家康、利家を招く。(文語)

忠臣、孝子の事蹟を見よ。(文語)

繪畫と彫刻の展覧會がある。

視察團は今日か明日に到着する。

あれとこれと、どちらがよいか。

右の例の二つの文節も、それ／＼對等の關係で連なつてゐる。

問題八 右の對等の關係で連なる文節が、どんな

品詞で出来てゐるかを調べよ。

〔九〕 電燈は消えてゐる。

まことに尊いのは、母の力である。

右の文の二つの文節のうち、上の文節が主たる意味を表し、下の文節はこれに附屬して、或る意味を添へてゐる。これは用言と助動詞との關係に似てゐる。これを附屬の關係にある文節といふ。

問題九 右の例の附屬の關係で連なる文節が、ど

んな品詞で出来てゐるかを調べよ。

問題十一 右の例の獨立語の文節が、どんな品詞で

出来てゐるかを調べよ。

問題十二 次の文の傍線を引いた文節と文節とは、

どんな關係にあるか。

(一) 湯が水になる。

(二) 樺太犬は、恐しく元氣がよい。

(三) かれは畫家で詩人だつた。

(四) そこに植ゑてゐるのは茄子だ。

(五) 途中での出来事を話して、ごらんなさ

な。

(六) 落花は、蝶の舞ふに似たり。(文語)

(七) 姫路城は、世界に誇るべき國寶なり。

(八) あつばれ、運の盡きぬるやつばらか

な。(文語)

### 三文の構造

〔一〕 文は文節から出来てゐる。

美しい花咲く。(文語)

美しく、咲きぬ。(文語)

ここへ来い。

花はもう散つたか。

みんなで山に行かうよ。

右の文に於ける「咲く」「咲きぬ」「来い」「散つたか」「行かうよ」は、そこで言ひ切りになる文節であり、「美しい」「花」「美しく」「ここへ」「花は」「もう」「みんなで」「山に」は、下へ続く文節である。右のやうに、文節には、切れる文節と続く文節とがある。さうして、一つの文には切れる文節がその最後に必ず一つあつて、そこで文が完結する。

続く文節は、主語述語の関係、修飾被修飾の関係、對等の関係、附屬の關係のいづれかで他の文節と結合する。獨立語は、他の一つの文節との關係を見ると、比較的獨立してゐるけれども、意味の上からは下の文節に續いて行くので、これも續く文節と見ることが出来る。

問題一 右の例文中の切れる文節は、どんな品詞で出来てゐるか。活用の有るものはその活

用形を、助詞はその種類を言へ。

問題二 續く文節はどうか。

【三】 文節の切れ續きは、

一 「咲く」「咲きぬ」「来い」「美しく」「美しく」のやうに、活用形によつて示される。

一 「散つたか」「行かうよ」「ここへ」「花は」「みんなで」「山に」のやうに、助詞によつて示される。

一 「花」「もう」のやうに、文節自身には特別のしるしがないが、他の文節との先後及び意味上の關係によつて知られる。

【三】 火事が起つた場合に、「火事だ。」と叫んだとすると、この「火事だ。」は一つの文である。これは一つの文節で出来てゐる。

(お前も 行くか。) はい。

(お前も 行くか。) 行きます。

見よ。

嬉しうな。

勉強するとも。

右によつても明らかやうに、一文中の文節の並び方は、次の通りである。

一 主語と述語とでは、主語が前に、述語が後に来る。

一 修飾語と被修飾語とでは、修飾語が前に、被修飾語が後に来る。

一 文節を接續する働きをするもの以外の獨立語は、文の最初に来る。

【五】 一つの文節が他の文節と結合する場合に、前の文節は後の文節に連なる又は係るといひ、後の文節は前の文節を受けるといふ。

【六】 幾つかの文節が結合して出来た文に於いては、

(甲) 美しい—花が—咲く。

準備の—整ふを—待て。(文語)  
のやうに、一つの文節が直ぐ次の文節と結合し、それが更に直ぐ次の文節と結合するといふやうに順次に結合して行くか、それとも、

(乙) 花が—美しく—咲く。

われ—汝の—才智を—試みむ。(文語)

これらも一文節で出来てゐる文である。このやうに、一文節で出来た文は、切れる文節だけで出来てゐる。

問題二 右の例文に就いて、それがどんな品詞で出来てゐるかを調べよ。

【四】 二つ以上の文節で出来てゐる文には、切れる文節のほかに、續く文節がある。一つの文では、切れる文節は唯一つであつて、他はすべて續く文節である。さうして、これらの文節が一定の順序に並び、最後の切れる文節に到つて文が終る。

問題四 次の文に就いて、主語と述語、修飾語と被修飾語、獨立語を區別せよ。

(一) 夜、いたく、更けたり。(文語)

(二) 學徒の、本分は、勉學だ。

(三) 一月一日、この、日は、一年の、始めです。

(四) 水は、方圓の、器に、隨ふ。(文語) (水隨方圓之器。)

(五) 善を、實むるは、朋友の、道なり。(文語)

(實善、朋友之道也。)

のやうに、一つの文節が、直後の文節でなく、幾つかの文節を隔てて、後の文節に連なつて行くかである。

(乙)の場合には、二つの違つた文節が、同じ一つの文節に係り、一つの文節が、二つの違つた文節を受けるのである。さうして、この二つの違つた文節は、直接には関係がなく、唯、同一の文節に連なるといふことによつて、間接の連絡があるばかりである。(三つ以上の場合も同様である。)しかし、このやうにして文節が、或は直接に、或は間接に、他の文節に繋がつて、その意味が次第にまとまつて行くのである。

〔七〕以上のやうな方法によつて、各文節の意味が順順に繋がつて行き、最後の切れる文節に到つて、すべての意味が統一されて文が完結する。

ふみ―讀む―暇も―なし。(文語)  
白く―大きな―木星が―見える。  
東京―京都―大阪は、日本の―三大都市である。

と。(文語)

又、文は、切れる文節が一つあるのが普通である。ところが、切れる文節を言ひ表さないことがある。

(さあ 出掛けよう。) 君は。  
どうぞ 大事な。  
名月や 池を めぐりて 夜もすがら。(文語)  
一寸の 蟲にも 五分の 魂。(文語)

問題六 右の例は、どんな切れる文節を補ひ得るか。

問題七 次の文の構造を調べよ。

- (一) それは、日本に 二つと ない りつばな塔である。
- (二) 廻廊に 圍まれた 中庭に ある 夢殿はわが 國で 一番 美しい 八角堂だと いはれて ゐる。
- (三) 一點の 雲も なく 晴れ渡れる 碧空は最も 人の 心を 爽快ならしむ。(文語)
- (四) 蒸し暑き 夏の 夕、涼み臺を いちじく の 下に 移して、一家 晚餐に 團樂す

文法篇

かれは。嵐や―波と―戦ひ通した。

子供が。庭で。樂しさうに。遊んで。ゐる。  
燕の。か細い。小さう。からだには、。その時の。寒さは。堪へがたかつた。  
ふるきを。たづねて、。新しきを。知る。

建物は。簡素では。あるが、。極めて。清潔である。  
春は。來たれども、。寒さ。未だ。去らず。

問題五 右の例の各文節が、他の文節とどんな關係で連なつてゐるかを調べよ。

〔八〕文は、切れる文節がその最後にあるのが普通である。ところが、場合によつて、切れる文節が普通の位置を變へることがある。

明かるい 海だ、どこまでも。  
問はばや、遠き 世々の 跡。(文語)  
言ふなかれ、今日 學ばずして 來日 あり

れば、竹葉 そよぎて 涼氣 おのづから 盤上に ほとばしる。(文語)

### 四 文の種類

〔一〕夏が 來た。  
今日は 涼しい。  
會場は ここだ。  
汽車は まだ 出ない。  
明日は 雨が 降るだらう。  
早く 行かう。

右の例のやうに、断定(肯定・否定)や推量・決意等の意味を述べるだけの文を平叙文といふ。

問題一 右の例文を文語に改めよ。  
〔二〕平叙文は、用言又は助動詞の終止形で終るのが普通である。しかし、文語では、これらの語が、助詞「ぞ」「なむ」を受けて文を終止する場合には連體形を用ひ、「こそ」を受けて終止する場合には已然形を用ひる。即ち係結の法則が行なはれる。  
風 吹きぬ。 風なむ 吹きぬる。

花 咲きつ。 花ぞ。 咲きつる。  
朝霧 流る。 朝霧こそ。 流るれ。

【三】 もう 歸りませうか。  
何を 持つて 來た。

源氏が 勢は いかほど あるぞ。(文語)  
汝は 物に 狂ひて かくは 言ふか。(文語)  
汝は かく 語りしに あらずや。(文語)

右の例のやうに、疑問の意を表す文、及び反語の意を表す文を疑問文といふ。

【四】 疑問文は、疑問を表す語があり、又は助詞「か」(口語・文語)、「や」「ぞ」(文語)などで終るのが普通である。但し、口語では疑問を表す語を含まず、唯、言葉の調子で疑問の意を表すことがある。

文語では、疑問文に疑問の助詞「か」「や」がある時、これを受けて文を終止する用言又は助動詞は、連體形を用ひる。

誰か ある。  
月や 出でたる。

これも係結の法則である。

悪を 友と、するなかれ。 善を 友と せよ。(文語)

いたく な歎き給ひそ。(文語)  
便 あらば かの 島へも 渡らばや。(文語)

右の例のやうに、命令・禁止又は願望の意を表す文を命令文といふ。

【八】 命令文は、用言又は助動詞の命令形、禁止の助詞「な」(口語・文語)、「な・そ」(文語)、又は願望の助詞「ばや」「なむ」(文語)で終止する。

命令文には、主語を言ひ表さないことが多い。  
【九】 あゝ、愉快、愉快。  
すばらしい 元氣だなあ。  
それは 困りましたね。  
かれの 働きの いかん 目ざましかりしよ。(文語)

天地は 大いなるかな。(文語)

右の例のやうに、感動の意を表す文を感動文といふ。  
【十】 感動文は、文の始めに感動詞の來ることが多く、感動詞だけから成ることもある。又、文の終りに感

【五】 文語では、右のやうに平叙文及び疑問文に係結の法則が行なはれる。他の種類の文には行なはれない。平叙文には「ぞ」「なむ」「こそ」の係りの助詞、疑問文には「か」「や」が用ひられる。

【六】 係結の法則は、活用する語で文を終止する時に限つて行なはれる。それ故、活用する語が助詞となり、又は他の語に連なる場合には適用されない。

憂き 世には 長らへじとぞ。 思へども……  
いにしへは 車もたげよ、火 かげよとこそ 言ひしを……

又、「ぞ」「なむ」「こそ」を受ける用言を言ひ表さない場合も少くない。

植附けの 準備に いそがはしとぞ。(聞く)。  
人々は たゞ 驚き恐るるのみなりとなむ。(言ふ)。

【七】 しかさま さも あるべきにこそ。(あれ)。  
椅子に お掛けなす。

早く しろ。  
決して 油断するな。

動を表す助詞のあるのが普通である。又、感動文では形容詞や形容動詞の語幹をそのまゝ、用ひることがある。

【十一】 右のやうに、文には、平叙文・疑問文・命令文・感動文の四種類がある。さうして、概して文の最後の切れる文節にそれの特徴が見られる。

問題 = 各種の文の切れる文節にどんな特徴があるか。

問題 = 次の文は、どの種類に属するかを言へ。  
又、係結の法則の行なはれてゐるものがあるたら、これを指摘せよ。

(一) 東海丸の船長久田佐助は、目前に迫るこの危急を避けるのに全力を盡くしたが、しかも遅かつた。忽ち一大音響と共に、ロイヤ汽船の船首は、東海丸の船腹を破つてしまつた。東海丸の船體は、ぐつと傾いた。すは、一大事。船長は、早速乗組員に命じて持ち場に就かせた。五隻のボートはおろされた。船客も船員も、みんなボートに乗

つた。船長は、何度か念を押すやうに言った。「みんな乗つたか。」「乗りました。」「一人も残つてゐないな。」「残つてをりません。」「残つたのは、たゞ船長一人であつた。」「船長、早くボートへ乗つてください。」「だが、返事はなかつた。船員の一人は、たまたまになつて馳せつけた。見れば、かれのからだは、旗の紐で、しつかと欄干に結びつけられてゐる。沈んで行く船と運命を共にしようとする覺悟なのだ。船長は嚴かに答へた。「船と運命を共にするのは、船長の義務だ。お前は早く逃げろ。二人でも多く助つてくれるのが、私に對するお前たちの務めではないか。」

(三) 「やあ、助つてよかつたね。だが、あの熊が君の耳に口をつけて、何かさうやいてゐたやうだね。何と言つたの。」「うん、熊が『危険の迫つた時に、友達を見捨てるやうな者とは一しよに旅をするな』と教へてくれたんだ。」

(三) 「鹿の通はむする所を、馬の通はざるべきやうである。汝、案内者せよ。」「この身は年老いていかにもかなひ候まじ。」「さて、汝に予はなきか。」「さぶらふ。」「(文語)

# 漢文篇

## 一論學

論學示家塾諸生

古賀 煜

學者之病莫大於惰。惰心一萌萬事瓦裂。夫心猶水也。苟不爲之隄防。必有決溢之患。學猶登山也。少怠於行。日就汗下。人生一毫佚惰之念。其心蕩學退不占而可知也。或問劉安世曰。待制間居何以遣日。安世正色對曰。君子進德修業。維日不足。而可遣乎。此老而致仕者尙爾如此。矧遊學

漢文篇

有期者乎。夫子以博奕爲賢於飽食終日無所用心。亦惟痛戒惰夫而已。同窓共學。有兄弟之誼。計其微瑕。使獲罪於師。賊風敗俗之大者也。故小過當迭相箴規。若乃淫蕩兇悍。頑然無行。將汗染家塾風俗。當告師而罰之。猶然隱諱。是黨惡也。君子之惡莠。爲其害苗也。去莠者義也。莠去而良苗殖者仁也。彼蕩然無行之輩。加以譴罰者仁義之舉也。

學問事業不殊其效

藤田 彪

學問事業之難。一其故多端。而有大小弊四焉。曰。忽躬行。曰。廢實學。曰。泥於

三十七

經曰流於權夫學所以明人倫聖賢之教必本諸身而學者或不修禮義甚則失德汙行曾庸人之不若其取侮於世固不足怪且庸人之為惡世皆非之學者之為不善必有誘而做之者其害風教豈淺少哉是忽躬行之弊也其文人則曰五行竝下萬言立就使其居官治事或委瑣自用大失人望或沈溺風流不恤民隱其武人則曰通七書明八陣使其治兵練卒號令不明隊伍不整非華法則兒戲於是小人胥吏每得舞文弄法以握權柄而英偉倜儻之人亦或冷笑於草野巖穴之間天下之事亦危矣是廢實學之弊也其拘古者墨守

舊典不知變通講禮習儀非木偶則俳優以為合經其阿世者狂己從人闕然迎合無所不至以為通權是泥於經流於權之弊也天下之學道免於此四弊者或寡是猶工匠而廢其規矩道之不行非其不幸也

白鹿洞書院揭示

朱熹

父子有親君臣有義夫婦有別長幼有序朋友有信

右五教之目堯舜使契為司徒敬敷五教即此是也學者學此而已而其所以學之之序亦有五焉其

別如左  
博學之審問之慎思之明辨之篤行之

右為學之序學問思辨四者所以窮理也若夫篤行之事則自修身以至于處事接物亦各有要其別如左

言忠信行篤敬懲忿窒慾遷善改過  
右修身之要

正其義不謀其利明其道不計其功  
右處事之要

己所不欲勿施於人行有不得反求諸己  
右接物之要

熹竊觀古昔聖賢所以教人為

學之意莫非使之講明義理以修其身然後推以及人非徒欲其務記覽為詞章以釣聲名取利祿而已也今人之為學者則既反是矣然聖賢所以教人之法具存於經有志之士固當熟讀深思而問辨之苟知其理之當然而責其身以必然則夫規矩禁防之具豈待他人設之而後有所持循哉近世於學有規其待學者為已淺矣而其為法又未必古人之意也故今不復以施於此堂而特取凡聖賢所以教人為學之大端條列如右而揭之相問諸君其相與講明

遵守而責之於身焉則夫思慮  
云爲之際其所以戒謹而恐懼  
者必有嚴於彼者矣其有不然  
而或出於此言之所棄則彼所  
謂規者必將取之固不得而略  
也諸君其亦念之哉

論東漢教化 司馬光

臣光曰教化國家之急務也而俗吏  
慢之風俗天下之大事也而庸君忽  
之夫惟明智君子深識長慮然後知  
其爲益之大而收功之遠也光武遭  
漢中衰群雄糜沸奮起布衣紹恢前  
緒征伐四方日不暇給乃能敦尙經  
術賓延儒雅開廣學校修明禮樂武

功既成文德亦洽繼以孝明孝章通  
追先志臨雍拜老橫經問道自公卿  
大夫至於郡縣之吏咸選用經明行  
修之人虎賁衛士皆習孝經匈奴子  
弟亦遊大學是以教立於上俗成於  
下其忠厚清修之士豈惟取重於  
搢紳亦見慕於衆庶愚鄙汗穢之人  
豈惟不容於朝廷亦見棄于鄉里  
自三代既亡風化之美未有若東漢  
之盛者也  
及孝和以降貴戚擅權嬖倖用事賞  
罰無章賄賂公行賢愚渾殺是非顛  
倒可謂亂矣然猶縣縣不至於亡者  
上則有公卿大夫袁安楊震李固杜  
喬陳蕃李膺之徒而引廷爭用公義

以扶其危下則有布衣之士符融郭  
泰范滂許邵之流立私論以救其敗  
是以政治雖濁而風俗不衰至有觸  
冒斧鉞僵仆於前而忠義奮發繼起  
於後隨踵就戮視死如歸夫豈特數  
子之賢哉亦光武明章之遺化也當  
是之時苟有明君作而振之則漢氏  
之祚猶未可量也不幸承承陵夷頽敝  
之餘重以桓靈之昏虐保養姦回過  
於骨肉殄滅忠良甚於寇讎積多土  
之憤蓄四海之怒於是何進召戎董  
卓乘豐袁紹之徒從而構難遂使乘  
輿播越宗廟丘墟王室蕩覆烝民塗  
炭大命隕絕不可復救然州郡擁兵  
專地者雖互相吞噬猶未嘗不以尊

漢爲辭以魏武之暴戾疆仇加有大  
功於天下其蓄無君之心久矣乃至  
沒身不敢廢漢而自立豈其志之不  
欲哉猶畏名義而自抑也由是觀之  
教化安可慢風俗安可忽哉  
(資治通鑑)

一一經國

爲政以德 論語

子曰爲政以德譬如北辰居其所而  
衆星共之  
子曰道之以政齊之以刑民免而無  
恥道之以德齊之以禮有恥且格  
哀公問曰何爲則民服孔子對曰舉  
直錯諸枉則民服舉枉錯諸直則民

不服。

定公問君使臣臣事君如之何孔子對曰君使臣以禮臣事君以忠子謂子產有君子之道四焉其行己也恭其事上也敬其養民也惠其使民也義

子游為武城宰子曰女得人焉爾乎曰有澹臺滅明者行不由徑非公事未嘗至於偃之室也

子曰巍巍乎舜禹之有天下也而不與焉

子曰大哉堯之為君也巍巍乎唯天為大唯堯則之蕩蕩乎民無能名焉巍巍乎其有成功也煥乎其有文章子貢問政子曰足食足兵民信之矣

小過舉賢才曰焉知賢才而舉之曰舉爾所知爾所不知人其舍諸子曰無為而治者其舜也與夫何為哉恭己正南面而已矣

王道

孟子子

齊宣王問曰齊桓晉文之事可得聞乎孟子對曰仲尼之徒無道桓文之事者是以後世無傳焉臣未之聞也無以則王乎曰德何如則可以王矣曰保民而王莫之能禦也曰若寡人之可以保民乎哉曰可曰何由知吾可也曰臣聞之胡龔曰王坐於堂上有牽牛而過堂下者王見之曰牛何之對曰將以饗鐘王曰舍之吾不忍

子貢曰必不得已而去於斯三者何先曰去兵子貢曰必不得已而去於斯二者何先曰去食自古皆有死民無信不立

齊景公問政於孔子孔子對曰君君臣臣父父子子公曰善哉信如君不君臣不臣父不父子不子雖有粟吾得而食諸

子曰聽訟吾猶人也必也使無訟乎子張問政子曰居之無倦行之以忠季康子問政於孔子孔子對曰政者

正也子帥以正孰敢不正子路問政子曰先之勞之請益曰無倦仲弓為季子宰問政子曰先有司赦

其穀棘若無罪而就死地對曰然則廢鐘與曰何可廢也以羊易之不識有諸曰有之曰是心足以王矣百姓皆以王為愛也臣固知王之不忍也王曰然誠有百姓者齊國雖褊小吾何愛一牛即不忍其穀棘若無罪而就死地故以羊易之也曰王無異於百姓之以王為愛也以小易大彼惡知之王若隱其無罪而就死地則牛羊何擇焉王笑曰是誠何心哉我非愛其財而易之以羊也宜乎百姓之謂我愛也曰無傷也是乃仁術也見牛未見羊也君子之於禽獸也見其生不忍見其死聞其聲不忍食其肉是以君子遠庖廚也



王說曰詩云他人有心予忖度之夫子之謂也夫我乃行之反而求之不得吾心夫子言之於我心有戚戚焉此心之所以合於王者何也曰有復於王者曰吾力足以舉百鈞而不足以舉一羽明足以察秋毫之末而不見輿薪則王許之乎曰否今恩足以及禽獸而功不至於百姓者獨何與然則一羽之舉不舉為不用力焉輿薪之不見為不用明焉百姓之不見保為不用恩焉故王之不王不為也非不能也曰不為者與不能者之形何異曰挾泰山以超北海語人曰我不能是誠不能也為長者折枝語人曰我不能是不為也非不能也故王

之不王非挾泰山以超北海之類也王之不王是折枝之類也老吾老以及人之老幼吾幼以及人之幼天下可運於掌詩云刑于寡妻至于兄弟以御于家邦言舉斯心加諸彼而已故推恩足以保四海不推恩無以保妻子古之人所以大過人者無他焉善推其所為而已矣今恩足以及禽獸而功不至於百姓者獨何與權然後知輕重度然後知長短物皆然心為甚王請度之抑王興甲兵危士臣構怨於諸侯然後快於心與王曰否吾何快於是將以求吾所大欲也曰王之所大欲可得聞與王笑而不言曰為肥甘不足

於口與輕煖不足於體與抑為采色不足視於目與聲音不足聽於耳與便嬖不足使令於前與王之諸臣皆足以供之而王豈為是哉曰否吾不為是也曰然則王之所大欲可知已欲辟土地朝秦楚莅中國而撫四夷也若所為求若所欲猶緣木而求魚也王曰若是其甚與曰殆有甚焉緣木求魚雖不得魚無後災以若所為求若所欲盡心力而為之後必有災曰可得聞與曰鄰人與楚人戰則王以為孰勝曰楚人勝曰然則小國不可以敵大寡固不可以敵衆弱固不可以敵強海內之地方千里者九齊集有其一以一眼八何以異於鄰

敵楚哉蓋亦反其本矣今王發政施仁使天下仕者皆欲立於王之朝耕者皆欲耕於王之野商賈皆欲藏於王之市行旅皆欲出於王之塗天下之欲疾其君者皆欲赴愬於王其若是孰能禦之王曰吾惛不能進於是矣願夫子輔吾志明以教我我雖不敏請嘗試之曰無恆產而有恆心者惟士為能若民則無恆產因無恆心苟無恆心放辟邪侈無不為已及陷於罪然後從而刑之是罔民也焉有仁人在位罔民而可為也是故明君制民之產必使仰足以事父母俯足以畜妻子樂歲終身飽凶年免於死亡然後驅而之善故

民之從之也輕。今也制民之產，仰不足以事父母，俯不足以畜妻子，樂歲終身苦，凶年不免於死亡。此惟救死而恐不贍，奚暇治禮義哉？王欲行之，則盍反其本矣。五畝之宅，樹之以桑，五十者可以衣帛矣。雞豚狗彘之畜，無失其時，七十者可以食肉矣。百畝之田，勿奪其時，八口之家，可以無飢矣。謹庠序之教，申之以孝悌之義，頒白者不負戴於道路矣。老者衣帛食肉，黎民不飢不寒，然而不王者，未之有也。

以修身爲本 大學

大學之道在明明德，在親民，在止

於至善。知止而后有定，定而后能靜，靜而后能安，安而后能慮，慮而后能得。物有本末，事有終始，知所先後，則近道矣。  
 古之欲明明德於天下者，先治其國。欲治其國者，先齊其家。欲齊其家者，先修其身。欲修其身者，先正其心。欲正其心者，先誠其意。欲誠其意者，先致其知。致知在格物。物格而后知至，知至而后意誠。意誠而后心正，心正而后身修。身修而后家齊，家齊而后國治，國治而后天下平。  
 自天子以至庶人，壹是皆以修身为本。其本亂而末治者，否矣。其所厚者

薄，而其所薄者厚，未之有也。

九經 中庸 庸

凡爲天下國家，有九經。曰：修身也，尊賢也，親親也，敬大臣也，體群臣也，子庶民也，來百工也，柔遠人也，懷諸侯也。修身則道立，尊賢則不惑，親親則諸父昆弟不怨，敬大臣則不眩，體群臣則士之報禮重，子庶民則百姓勸，來百工則材用足，柔遠人則四方歸之，懷諸侯則天下畏之。  
 齊明盛服，非禮不動，所以修身也。去諛遠色，賤貨而貴德，所以勸賢也。尊其位，重其祿，同其好惡，所以勸親親也。官盛任使，所以勸大臣也。忠信重

祿，所以勸士也。時使薄斂，所以勸百姓也。日省月試，既廩稱事，所以勸百工也。送往迎來，嘉善而矜不能，所以柔遠人也。繼絕世，舉廢國，治亂持危，朝聘以時，厚往而薄來，所以懷諸侯也。  
 凡爲天下國家，有九經。所以行之者一也。凡事豫則立，不豫則廢。言前定，則不跲，事前定，則不困，行前定，則不疚，道前定，則不窮。  
 在下位，不獲乎上，民不可得而治矣。獲於上，有道，不信乎朋友，不獲乎上矣。信乎朋友，有道，不順乎親，不信乎朋友矣。順於親，有道，反諸身，不誠，不順乎親矣。誠身有道，不明乎善，不誠

乎身矣。誠者天之道也。誠之者人之道也。博學之，審問之，慎思之，明辨之，篤行之。有弗學，學之弗能，弗措也。有弗問，問之弗知，弗措也。有弗思，思之弗得，弗措也。有弗辨，辨之弗明，弗措也。有弗行，行之弗篤，弗措也。人一能之，己百之；人十能之，己千之。果能此道矣，雖愚必明，雖柔必強。

三氣節

大丈夫

孟子

景春曰：公孫衍、張儀，豈不誠大丈夫哉？一怒而諸侯懼，安居而天下熄。孟子曰：是焉得為大丈夫乎？子未學禮

以致亂，欲制禍亂於未萌之先，非得可畏者而任之不可也。漢汲長孺、吳張子布輩，皆負氣自高，昌言倨色，不少屈抑，以取合當世視人君之尊，不為之動。遇事輒面爭其短，無所忌。此皆流俗所謂戇人也。而朝廷恆倚之以為重，狐鼠之盜，闕其進退，以為恭肆。彼豈用區區之才，智以服人哉？人望而憚之，以其氣節之足尚也。國家可使數十年無才智之士，而不可一日無氣節之臣。譬彼甘脆之味，雖累時月不食，未足為病。而薑桂之和，不可斯須無之。人君無可畏者在其側，欲無危敗難矣。余少慕古之戇者，欲起長孺、子布與

乎。丈夫之冠也，父命之；女子之嫁也，母命之。往送之門，戒之曰：往之女家，必敬必戒，無違夫子。以順為正者，妾婦之道也。居天下之廣居，立天下之正位，行天下之大道，得志與民由之，不得志獨行其道，富貴不能淫，貧賤不能移，威武不能屈，此之謂大丈夫。

戇窩記

方孝孺

士之可貴者，在氣節，不在才智。天下未嘗無才智之士，而世之亂也，恆以用才聘智者，馳騫太過，釣奇竊名，以悅其君，卒致無窮之禍。而氣節之士，不與焉。氣節者，偃蹇可畏，而才智者，敏慧可喜，可喜者易以成功，亦易

之交，而不可得，則思博交海內之士，以觀其所存。謂余為戇者有矣，而慕乎戇者，未始或見。豈節義之士，獨少於今之時乎？抑遇合之術，固有不同也。今也天子懲近代弊，立諫諍風，厲在位，俾得言事，誠得戇者出，以應其求，則治道可成矣。同邑潘君伯理甫，年七十餘，而以戇名。其窩，豈慕長孺輩者乎？於其名，可從而知其志，惜其老而不獲見於用也。然有志者，不累乎用舍，居乎家，行乎鄉，與用邦國，奚異焉？使長孺、子布為布衣，亦將聞于時，傳于後。其肯泯然與庸衆人等乎？君居其名師其道，言論事為，必有卓越於世者，是亦余之所慕者也。願造

君之窩而相與論之。

### 四文藻

唐之文藻

那珂通世

玄宗之世、國內升平、文藝熾昌、詩人名家者不可勝數、而杜甫為其冠、李白、王維、孟浩然等次之、杜甫少貧、舉進士不第、困長安、玄宗見其賦、奇之、待制集賢院、會祿山亂、為賊所得、逃謁肅宗、拜右拾遺、尋棄官、寓秦州、樵採自給、流落劍南、為其帥嚴武參謀、武卒、客遊江湖、死于衡山之陽、甫曠放不自檢、好談大事、高而不切、數當寇亂、挺節無汗、為歌詩、傷時、槩弱情

不忘君、人憐其忠、李白有逸才、豪放嗜飲、飄然有超世之心、嘗至長安、學士賀加章見其文、歎曰、子謫仙人也、薦之、玄宗供奉翰林、白猶與飲、徒日醉於市、頃之辭去、浮遊四方、肅宗時、得罪、流于夜郎、會赦得釋、客死江南、李杜之詩、倘偉佚宕、不假雕琢之工、古風近體、皆造其妙、於是唐詩蔚然大興、遂為後世之模範、韓愈以宏才卓識、用力古文、綜覈百家、鎔而化之、刊陳刻偽、粹然一出於正、而滉洋自肆、無所拘束、遂一洗八代之陋習、使唐之文章、追蹤於周漢、當時名亞於愈者、唯柳宗元、宗元與順宗幸臣王叔文友善、及叔文用事、

引陸贄、劉禹錫等參計議、宗元亦預焉、宦官嫉之、讒毀沸騰、憲宗立、悉貶竄、其黨賜叔文死、宗元由是廢黜、自放於山水間、湮厄感鬱、一寓諸文、愈嘗評之曰、雄深雅健、似司馬遷、李翱、皇甫湜、從愈學、翽得其謹嚴、湜得其奇崛、孫樵又傳湜法、刻意求奇、皆不逮韓、柳、韓、柳又善詩、俱如其文、同時工詩者、韋應物、劉禹錫、張籍、白居易、居易長樂府、用語平易、以曲折盡情、自成一家、稍後而有杜牧、李商隱、牧、詩豪而艷、有氣槩、人號小杜、以別杜甫、商隱學甫、寄託深遠、但語傷緜麗、

(支那通史)

### 後出塞

杜甫

朝進東門營、暮上河陽橋、  
落日照大旗、馬鳴風蕭蕭、  
平沙列萬幕、部伍各見招、  
中天懸明月、令嚴夜寂寥、  
悲筋數聲動、壯士慘不驕、  
借問大將誰、恐是霍嫖姚、

(唐詩選)

### 哀江頭

杜甫

少陵野老吞聲哭、  
春日潛行曲江曲、  
江頭宮殿鎖千門、  
細柳新蒲為誰綠、

盛時樂極

漢文篇

憶昔霓旌下南苑  
苑中萬物生顏色  
昭陽殿裏第一人  
同輦隨君侍君側  
輦前才人帶弓箭  
白馬嚼嚙黃金勒  
翻身向天仰射雲  
一箭正墮雙飛翼  
明眸皓齒今何在  
血汗遊魂歸不得  
清渭東流劍閣深  
去住彼此無消息  
人生有情淚沾臆  
江水江花豈終極  
黃昏胡騎塵滿城

欲往城南忘城北 (唐詩選)

把酒問月 李白

青天有月來幾時  
我今停杯一問之  
人攀明月不可得  
月行卻與人相隨  
皎如飛鏡臨丹闕  
綠煙滅盡清輝發  
但見宵從海上來  
寧知曉向雲間沒  
白兔擣藥秋復春  
嫦娥孤棲與誰鄰  
今人不見古時月  
今月曾經照古人

古人今人若流水  
共看明月皆如此  
唯願當歌對酒時  
月光長照金樽裏

峨眉山月歌 李白

峨眉山月半輪秋  
影入平羌江水流  
夜發清溪向三峽  
思君不見下渝州

(唐詩選)

送元二使安西

渭城朝雨浥輕塵  
客舍青青柳色新

王維

勸君更盡一杯酒  
西出陽關無故人 (三體詩)

春曉 孟浩然

春眠不覺曉  
處處聞啼鳥  
夜來風雨聲  
花落知多少

(唐詩選)

師說 韓愈

古之學者必有師。師者所以傳道授業解惑也。人非生而知之者。孰能無惑。惑而不從師。其為惑也終不解矣。生乎吾前其聞道也固先乎吾。吾從之。生乎吾後其聞道也亦先乎吾。吾從之。夫庸知其年之先後

漢文篇

五十三

生於吾乎。是故無貴無賤無長無少。道之所存師之所存也。嗟乎師道之不傳也久矣。欲人之無惑也難矣。古之聖人其出人也遠矣。猶且從師而問焉。今之衆人其下聖人也亦遠矣。而恥學於師。是故聖益聖愚益愚。聖人之所以爲聖愚人之所以爲愚其皆出於此乎。愛其子擇師而教之於其身也則恥師焉惑矣。彼童子之師授之書而習其句讀者也。非吾所謂傳其道解其惑者也。句讀之不知惑之不解或師焉或不焉小學而大遺吾未見其明也。巫醫樂師百工之人不恥相師士大夫之族曰師曰弟子云者則群聚

而笑之問之則曰彼與彼年相若也道相似也。位卑則足羞官盛則近諛。嗚呼師道之不復可知矣。巫醫樂師百工之人君子鄙之。今其智乃反不能及可怪也歟。聖人無常師孔子師郟子萇弘師襄老聃郟子之徒其賢不及孔子。孔子曰三人行必有我師焉。故弟子不必不如師師不必賢於弟子。聞道有先後術業有專攻如是而已。李氏子蟠年十七好古文六藝經傳皆通習之。不拘於時請學於余。余嘉其能行古道作師說以貽之。

(文章軌範)

左遷至藍關示姪孫湘

韓愈

一封朝奏九重天  
夕貶潮州路八千  
欲爲聖明除弊事  
肯將衰朽惜殘年  
雲橫秦嶺家何在  
雪擁藍關馬不前  
知汝遠來應有意  
好收吾骨瘴江邊

潮州韓文公廟碑

蘇軾

匹夫而爲百世師一言而爲天下法。是皆有以參天地之化關盛衰之運。其生也有自來其逝也有所爲。故申呂自嶽降傳說爲列星古今所傳不

可誣也。孟子曰我善養吾浩然之氣。是氣也寓於尋常之中而塞乎天地之間。卒然遇之王公失其貴晉楚失其富良平失其智賁育失其勇儀秦失其辯。是孰使之然哉。其必有不依形而立不恃力而行不待生而存不隨死而亡者矣。故在天爲星辰在地爲河嶽幽則爲鬼神而明則復爲人。此理之常無足怪者。自東漢以來道喪文弊異端竝起。歷唐貞觀開元之盛輔以房杜姚宋而不能救。獨韓文公起布衣談笑而應之天下靡然從公。復歸于正。蓋三百

之師。此豈非參天地、關盛衰、浩然而獨存者乎？蓋嘗論天人之辨，以謂人無所不至。惟天不容僞，智可以欺王公，不可以欺豚魚。力可以得天下，不可以得匹夫匹婦之心。故公之精誠，能開衡山之雲，而不能回憲宗之惑；能馴鱷魚之暴，而不能弭皇甫鏞、李逢吉之謗；能信於南海之民，廟食百世，而不能使其身一日安於朝廷之上。蓋公之所能者，天也；其所不能者，人也。始潮人未知學，公命進士趙德為之師。自是潮之士，皆篤於文行，延及齊民。至于今，號稱易治。信乎孔子之言：「君子學道，則愛人；而小人學道，則易。」

使也。潮人之事公也，飲食必祭，水旱疾疫，凡有求必禱焉。而廟在刺史公堂之後，民以出入為艱。前大守欲請諸朝，作新廟，不果。元祐五年，朝散郎王君濂來守，是邦。凡所以養士治民者，一以公為師。民既悅服，則出令曰：「願新公廟者，聽民權趨之。」卜地於州城之南七里，期年而廟成。或曰：「公去國萬里，而謫于潮，不能一歲而歸，沒而有知其不眷戀于潮也。審矣。」軾曰：「不然。公之神在天下者，如水之在地中，無所往而不在也。而潮人獨信之深，思之至，焄蒿悽愴，若或見之。譬如鑿井得泉，而曰水專在是，豈理也哉？」

元豐元年，詔封公昌黎伯。故榜曰：「昌黎伯韓文公之廟。」潮人請書其事于石，因為作詩以遺之，使歌以祀公。其辭曰：

公昔騎龍白雲鄉，手扶雲漢分天章。天孫為織雲錦裳，飄然乘風來帝旁。下與濁世掃秕糠，西游咸池略扶桑。草木衣被昭回光，迨逐李杜參翱翔。汗流藉湜走且僵，滅沒倒景不得望。作書詆佛譏君王，要觀南海祝融先驅海若藏。約束蛟鱷如驅羊，鈞天無人帝悲傷。謳吟下招遺巫陽，曝牲雞卜羞我觴。

於餐荔丹與蕉黃，公不少留我涕滂。翩然被髮下大荒。種樹郭橐駝傳 柳宗元 郭橐駝不知始何名，病僂，隆然伏行，有類橐駝者，故鄉人號之「駝」。駝聞之曰：「甚善，名我固當。」因捨其名，亦自謂「橐駝」云。其鄉曰豐樂鄉，在長安西。駝業種樹，凡長安豪富人，為觀游及賣果者，皆爭迎取養。視駝所種樹，或移徙，無不活，且碩茂，實以蕃。他植者，雖窺伺，能慕莫能如也。有問之，對曰：「橐駝非能使木壽且孳也，能順木之天，以致。」

其性焉爾。凡植木之性，其本欲舒，其培欲平，其土欲故，其築欲密。既然已，勿動勿慮，去不復顧。其蒔也若子，其置也如棄，則其天者全，而其性得矣。故吾不害其長而已，非有能碩茂之也。不抑耗其實而已，非有能蚤而蕃之也。他植者則不然，根拳而土易，其培之也，若不過焉則不及，苟能有反是者，則又愛之太恩，憂之太勤，旦視而暮撫，已去而復顧，甚者爪其膚以驗其生枯，搖其本以觀其疎密，而木之性日以離矣。雖曰愛之，其實害之。雖曰憂之，其實讎之。故不我若也。吾又何能為哉！問者曰：以子之道，移之官理，可乎？駘曰：我知種

樹而已。理非吾業也。然吾居鄉，見長人者，好煩其令，若甚憐焉，而卒以禍。且暮吏來而呼曰：官命促爾耕，勸爾植，督爾穫，蚤繰而緒，蚤織而縷，字而幼孩，逐而雞豚。鳴鼓而聚之，擊木而召之。吾小人輟飧饗，以勞吏者，且不得暇，又何以蕃吾生而安吾性耶？故病且怠。若是則與吾業者，其亦有類乎？問者嘻曰：不亦善夫！吾問養樹得養人術，傳其事以為官戒也。

(唐宋八家文讀本)

江雪

柳宗元

千山鳥飛絕，萬徑人蹤滅。

孤舟蓑笠翁，獨釣寒江雪。  
 慈烏夜啼，白居易  
 慈烏失其母，啞啞吐哀音，晝夜不飛去，經年守故林。夜夜夜半啼，聞者為沾襟。聲中如告訴，未盡反哺心。百鳥豈無母，爾獨哀怨深。應是母慈重，使爾悲不任。昔有吳起者，母歿喪不臨。嗟哉斯徒輩，其心不如禽。慈烏復慈烏，鳥中之曾參。前赤壁賦，蘇軾

壬戌之秋，七月既望，蘇子與客泛舟。遊於赤壁之下，清風徐來，水波不興。舉酒屬客，誦明月之詩，歌窈窕之章。少焉，月出於東山之上，徘徊於斗牛之間。白露橫江，水光接天。縱一葦之所如，凌萬頃之茫然。浩浩乎如馮虛御風，而不知其所止；飄飄乎如遺世獨立，羽化而登仙。於是飲酒樂甚，扣舷而歌之。歌曰：桂棹兮蘭槳，擊空明兮泝流光。渺渺兮予懷，望美人兮天一方。客有吹洞簫者，倚歌而和之。其聲嗚嗚然，如怨如慕，如泣如訴。餘音嫋嫋，不絕如縷。舞幽壑之潛蛟，泣孤舟之嫠婦。蘇子愀然正襟危坐，而問客曰：何為其然也？客曰：月明星稀，鳥鵲南飛，此



非曹孟德之詩乎。西望夏口，東望武昌，山川相繆，鬱乎蒼蒼。此非孟德之困於周郎者乎？方其破荊州，下江陵，順流而東也，舳舻千里，旌旗蔽空，醜酒臨江，橫槊賦詩，固一世之雄也。而今安在哉？況吾與子漁樵於江渚之上，侶魚蝦而友麋鹿，駕一葉之輕舟，舉匏樽以相屬，寄蜉蝣於天地，渺滄海之一粟。哀吾生之須臾，羨長江之無窮，挾飛仙以遨遊，抱明月而長終。知不可乎驟得，託遺響於悲風。蘇子曰：客亦知夫水與月乎？逝者如斯，而未嘗往也。盈虛者如彼，而卒莫消長也。蓋將自其變者而觀之，則天地曾不能以一瞬，自其不變者而

觀之，則物與我皆無盡也。而又何羨乎？且夫天地之間，物各有主，苟非吾之所有，雖一毫而莫取。惟江上之清風，與山間之明月，耳得之而為聲，目遇之而成色，取之無禁，用之不竭，是造物者之無盡藏也。而吾與子之所共適。客喜而笑，洗盞更酌，肴核既盡，杯盤狼藉，相與枕藉乎舟中，不知東方之既白。

(古文真寶後集)

岳陽樓記

范仲淹

慶曆四年春，滕子京謫守巴陵郡。越明年，政通人和，百廢俱興，乃重修岳陽樓，增其舊制，刻唐賢今人詩賦于其上，屬予作文以記之。

予觀夫巴陵勝狀，在洞庭一湖，銜遠山，吞長江，浩浩湯湯，橫無際涯，朝暉夕陰，氣象萬千。此則岳陽樓之大觀也。前人之述備矣。然則北通巫峽，南極瀟湘，遷客騷人，多會于此。覽物之情，得無異乎？若夫霪雨霏霏，連月不開，陰風怒號，濁浪排空，日星隱曜，山岳潛形，商旅不行，檣傾楫摧，薄暮冥冥，虎嘯猿啼，登此樓也，則有去國懷鄉，憂讒畏譏，滿目蕭然，感極而悲者矣。至若春和景明，波瀾不驚，上下天光，一碧萬頃，沙鷗翔集，錦鱗游泳，岸芷汀蘭，郁郁青青，而或長煙一空，皓月千里，浮光躍金，靜影沈璧，漁歌互答，此樂何極！登斯樓也，則有心曠神

怡，寵辱皆忘，把酒臨風，其喜洋洋者矣。

嗟夫！予嘗求古仁人之心，或異二者之為，何哉？不以物喜，不以己悲，居廟堂之高，則憂其民；處江湖之遠，則憂其君。是進亦憂，退亦憂。然則何時而樂耶？其必曰：先天下之憂而憂，後天下之樂而樂。噫！微斯人，吾誰與歸。

(古文真寶後集)

昭和二十一年三月七日印刷  
昭和二十一年三月十一日發行

國語 四  
定價 貳圓  
中等學校  
男子用

APPROVED BY MINISTRY  
OF EDUCATION  
(DATE Mar. 7, 1946)

著作權  
所有

發行者

東京部神田區岩本町三番地

中等學校教科書株式會社

代表者 龜井寅雄

印刷者

東京部牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

大日本印刷株式會社

代表者 佐久間長吉郎

配給元

東京部神田區渡路町二丁目九番地

日本出版配給統制株式會社

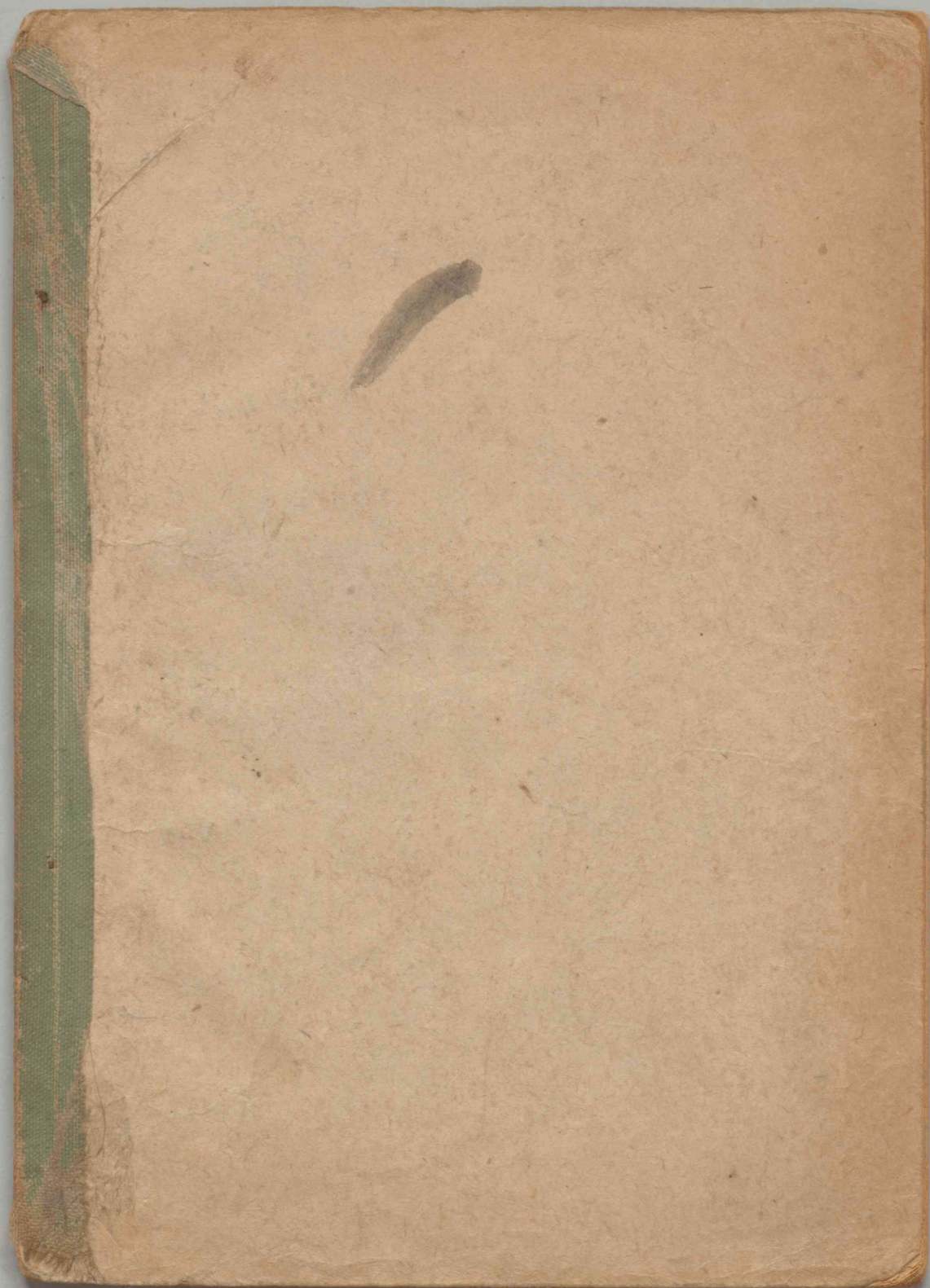
發行所

東京部神田區岩本町三番地

中等學校教科書株式會社

日本出版會會員番號1001016

(略名) 國語男四



求	在	也	於	乎	以	之	余	畏	薑	脆	士	足	以	進	朝	短	人	昌	漢
則	位	今	今	驕	觀	交	少	者	柱	之	而	尚	服	退	廷	無	君	言	汎
治	俾	也	之	者	其	而	慕	在	之	味	不	也	人	以	恆	所	之	倨	長
道	得	天	時	未	所	不	古	其	和	雖	可	國	哉	為	倚	忌	尊	色	孺
可	言	子	乎	始	存	可	之	側	不	累	一	家	人	恭	之	此	不	少	吳
成	事	徵	抑	或	謂	得	驕	欲	斯	時	日	可	望	肆	以	皆	為	張	
矣	誠	近	遇	見	余	則	者	無	須	月	無	使	而	彼	為	流	之	子	
同	得	代	合	豈	為	思	欲	危	無	不	氣	數	憚	豈	重	俗	動	布	
邑	驕	弊	之	節	驕	博	起	敗	之	食	節	十	之	用	狐	所	遇	輩	
潘	者	立	術	義	者	交	長	難	人	未	之	年	以	區	鼠	謂	事	皆	
君	出	諫	固	之	有	海	孺	矣	君	足	臣	無	其	區	之	驕	輒	負	
伯	以	諱	有	士	矣	內	子	而	無	為	譬	才	氣	之	人	面	合	氣	
理	應	風	不	獨	而	之	布	慕	可	病	言	智	節	盜	爭	當	世	自	
甫	其	厲	同	少	慕	士	與			而	甘	之	之	智	其	視	高	高	

君	越	君	時	異	乎	老	輩	年
之	於	居	傳	焉	用	而	者	七
窩	世	其	于	使	舍	不	乎	十
而	者	名	後	長	居	獲	於	餘
相	是	師	其	孺	乎	見	其	而
與	亦	其	肯	子	家	於	名	以
論	余	道	泯	布	行	用	可	驕
之	之	言	然	為	乎	也	從	名
	所	論	與	布	鄉	然	而	其
	慕	事	庸	衣	與	有	知	富
	者	為	衆	亦	用	志	其	豈
	也	必	人	將	邦	者	志	慕
	願	有	等	聞	國	不	惜	長
	造	卓	乎	于	奚	累	其	孺